

A study on Rohan Koda's Inquiry *Ongen-ron*  
露伴〈音幻論〉考

日 沼 滉 治

一 はじめに

この小論は幸田露伴の『音幻論』の大略を吟味しようとする。昭和二十二年五月三十日に東京都中央区の洗心書林から発行された『音幻論』によれば、これは「土橋利彦筆記」による口述であり、論考それぞれの発表年月はつぎのとおりである。

シとチ	昭和十九年八月
近似音 本具音	同 年十一月
シ	同 年十一月
音を記する符	未 発 表
韻	昭和二十年一月

音の各論

同年二月―九月

累音 対音 省音

添音 倒音 擬音

同 年十一月

聯音

同 年十二月

附録 言語と文字の間の溝

昭和十三年九月

つまり「附録」を別にすれば『音幻論』の本体は、サイパン全滅・東條内閣総辞職の昭和十九年夏の口述筆記には始まり、翌二十年の暮れにかけてつぎつぎに発表されたものであって、その浮世ばなれした閑文字の掲載は、統廃合あいついだ敗戦直前の出版界と戦後の紙不足とをあわせ思えば、すでに異常であろう。「音幻」という主題も尋常でない。しかも露伴は空襲と疎開と被災によって半生の関係資料を中途から失っていたが、転居の先々で口述をつづけ、ともかくも一書を成して世に遺した。露伴最後の文業として『音幻論』を吟味するゆえんである。

小論は「音幻・声韻・入声・聯音・声喩」などをキー・ワードとし、各篇発表の事情と内容とを加味してつぎの順序をたどろうとする。

序、シとチ、近似音・本具音・ン、韻、音の各論、聯音、累音・対音・省音・添音・倒音・擬音、音幻

## 二 序

『音幻論』成立の事情は、露伴みずから「序」に語っている。戦災で今は灰になったけれども、小石川の旧

書齋のガラス障子のうえに墨筆で「余の未来の著書目録」というべき「材料収集の目安書」のようなものをしたためてあったという。

天台画巻、竹塩論、八荒箋、夫白命、音幻、刃中、刃秘、雪兔、長春西遊、アイルラット、荒禽、祈、善才、天真一目、香、単、

そのうちの「音幻」とある二字が、「今こゝにふつゝかな形ではあるが、出版の運びに至った音幻論」であるという。これらの文字については、かねて「諸種の雑書」やこれと思う材料に遭遇したならば随分高い償を吝まない、という心持であったようである。「ふつゝかな形ではあるが」と語るところに「天台画巻」以下の主題群とその材料群とに寄せる愛惜の思いがいくぶん読み取れるかもしれない。「昭和丙戌の歳」——。露伴はその二か月後の昭和二十二年七月三十日、千葉県市川市菅野の仮住まいで息をひきとった。

話を『音幻論』にしぼろう。「これは国語について、言語学その他で諸先輩が色々な優秀な意見を披瀝してゐられたのと別に、それとは少しく異つた考を余は早くから有してゐて」とある。「純粹に音の上から言語文章の大きな問題を生じることを意識してゐたので」とある。露伴みずから「零細的に書きしるして置いたノート類」のほかにも、国語の排列のしかたに一種の考案をもちいた「半紙本十冊にも余る字引のやうなもの」を甥の四郎という者に托してつくっておいた、ともある。

『音幻論』の発想と資料の輪郭がしのばれるが、せつかくのノート類と半紙本十冊あまりの字書は、空襲と疎開と被災のさなかにいくぶんでも活用されたのであろうか。耳は疎く目もほとんど利かなかったが、「伊東にゐた頃、シとチの話をして土橋君に筆記して貰つた」とあるから、「シとチ」(『三田文学』昭19・8・1「シ」と

「チ」の場合、転地先ながら必須の資料群はたずさえたことであろう。「近似音」「本具音」「ン」(『三田文学』昭19・10・1「近似音その他」)の場合も、空襲下の書齋に資料群が備わっていたはずである。

つまり資料群に関するかぎり、『音幻論』の性格は昭和二十年三月二十四日の疎開以前と疎開以後、とくに五月二十五日の被災以後とで異なるようである。『音幻論』を吟味する視点も、前者と後者とではいくらか異なっている。

疎開以前 「シとチ」「近似音」「本具音」「ン」「韻」「音の各論」前半

被災以後 「音の各論」後半「累音」「対音」「省音」「添音」「倒音」「擬音」「聯音」

前者について例証や典拠をめぐって念入りの検討がゆるされようが、後者にそれは酷というものである。むしろ豊富な語例を総体うけとめながら、露伴の言語観が問われなければならないだろう。〈音幻〉に露伴はどのような言語観を託していたのか。〈音幻〉は露伴〈文学〉にどうかかわっていたのか。小論の主題もここにしぼられることになる。

### 三 シとチ

「音幻論一部」「し」と「ち」は昭和十九年八月一日、文芸雑誌『三田文学』19巻6号に「露伴学人述」として掲載された。つづく「近似音その他」「音幻論の一部」は、十一月で休刊になる前月の十月一日19巻8号の掲載である。同誌は明治四十三年五月に慶応義塾文科の機関誌として森鷗外・上田敏を顧問に、教授の永井荷風を主幹として発足しており、同誌の久保田万太郎・水上瀧太郎は小石川表町の露伴宅をたずねている。

「シとチ」で露伴は、風にかんする邦語古来の称呼をまず列挙する。列挙したのちに立言している、――発音は五十音図の伝来や「仮名遣」の正訛の論に先立つ事実である。元来、言語は〈発する人―聴く人〉の〈復現―復聴〉が一圈をなして初めて成立つものである。この「言語」なる用語は露伴に独特なものらしく、いわゆる話しことばの系列に近いものであろう。五十音図<sup>③</sup>や仮名遣い<sup>④</sup>よりも発音という事実が第一。仮名遣いの窮屈な議論のまえに、日本語の「音韻の自然の流行の径路を正しく観察することが何よりの先務であらねばならぬ」という小論の五「韻」で吟味したい。ただし、結びの一節はさびしい。

音幻論は、その意味で長年考へてゐたことであるが、その大綱を成就するに及ばないで已に私は耳も疎く、目も殆ど盲するに及んでゐる。

そこで今ただ、シとチだけのことを言つて、その万分の一の思考を遠慮しながら一例として述べたまでである、とある。その「大綱」と「一例」の吟味が小論の眼目とならう。

露伴があげた、風にかんする邦語古来の称呼をまず一覧しよう。

シの系列<sup>⑤</sup>

- |      |                        |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------------------------|------|------|------|------|------|------|------|
| ○アラシ | ○アナシ                   | ○ナガシ | ○ニシ  | ○ヒガシ | ○シマキ | ○シキリ | ○シグレ | ○シブキ |
| ○シナト | ○シナトベノ命 <sup>ニトコ</sup> | ○アナジ | ○ツムジ | ○ヤマジ | ○ヤマセ | ○ナガセ | ○カゼ  |      |
| ○アナゼ | ○ヤマゼ                   | ○ヤウズ | ○イナサ |      |      |      |      |      |

チの系列

- |     |      |      |     |     |     |      |      |      |
|-----|------|------|-----|-----|-----|------|------|------|
| ○コチ | ○ハヤチ | ○ハガチ | ○チギ | ○チル | ○チリ | ○ヒカタ | ○ハヤテ | ○トイテ |
|-----|------|------|-----|-----|-----|------|------|------|

○アラチ山 ○ハヤチネ山<sup>サ</sup>

列举の順に語例と典拠とを【 】内に示し、例歌には塙書房『補訂版 萬葉集 本文篇』および岩波書店『新日本古典文学大系 別巻 八代集総索引』、そのほかは角川書店『新編国歌大観』の歌番号、例句には『新日本古典文学大系』各本の句番号をほどこす。

○アラシ 【「暴風をアラシといふ。アラは暴、シは風である。」

万葉集卷一74、み吉野の山の下風<sup>アラシ</sup>の寒けくにはたや今夜<sup>こよひ</sup>も我がひとり寝む

同卷十<sup>2350</sup>、冬雑歌、あしひきの山の下風は吹かねども君なき夕<sup>よひ</sup>は豫<sup>かね</sup>て寒しも

古今集卷五<sup>249</sup>、秋哥下、康秀、

吹くからに秋の草木のしをるれば宜山風<sup>むべ</sup>をあらしといふらむ】

露伴はアラシに相当する万葉仮名の表記には手をくわえずに片仮名でルビをつけ、つぎのアナシ以下にも同じ方式をとる。ただし万葉集卷十<sup>2350</sup>の部類は「冬相聞」とあるべきところか。以下、簡略をむねとして引例と典拠、語義の問題点を示すにとどめよう。

○アナシ 【『雅言集覧』<sup>6</sup>のつぎの例歌四首、顕昭の歌学書『袖中抄』<sup>7</sup>と貝原益軒『日本釈名』の語源説と「シが風であることは分明である。」

拾玉集<sup>9</sup>三、かねてしりぬあなしの風をおもふより心づくしのなみぢなりとは

新千載集秋下18、俊成、吹はらふあなしの風に雲晴れてなこのとわたるあり明の月

続古今集秋上11、前内大臣、あなし吹ゆつきが峰に雲きえて檜原の上に月わたる見ゆ

後拾遺集九 532 羈旅、通俊、あなしふくせとのしほあひに舟出してはやくぞ過るさやかた山を】

「山名穴師山が古歌に見える」というのは『古今和歌集』神あそびの歌1076のことであろう。露伴が引くつぎの歌も穴師山にゆかりのものである。

【万葉集卷十二 3126、纏向まきむくの痛足アナンの山に雲居つゝ雨は零れどもぬれつゝぞ来し】

○ナガシ【シは風の義であるという例 「ナガシは長風で、夏のはじめ時分に日々続いて吹く風で一日でやまず、それが吹いて夏の状態がはつきりする。現在東京の船人の語。】江戸前の釣人であった露伴学人の証言である。ただし西日本の方言では古来梅雨10の義か。

○ニシ【今日の歌語では西風といふべき所である 「古事記下巻、仁徳天皇の条に、倭へに爾斯ニシ吹きあげて雲ばなれ退きをりともわれ忘れめや】

○ヒガシ【ヒムカ・シの約まったもの』（『古事記伝』<sup>11</sup>に従ったものか。「ヒガシが直ちに東風なる証歌は今あげ難いが」「東方より吹く風をヒガシといったことは争ふべくもない。」「琉球の方言12で東のことをヒガといふのは、ヒガとシがもと分れてゐた証になるかも知れぬ。】

○シマキ【「風卷である。』（「風卷」<sup>13</sup>の意か）

山家集 286 冬歌、せと渡るたななし小舟心せよ霞みだるゝしまきよこぎる

同 1006 雑歌、くれ舟よあさづまわたり今朝なせそ伊吹のたけに雪しまくなり】

○シキリ

【万葉集卷六 937、往きめぐり見とも飽かめや名寸隅なきずみの船瀬の濱にしきる白浪

貞享本金槐集<sup>13</sup> 678、笹の葉に霰さやぎてみ山べはみねの木がらししきりて吹きぬ

「このシキリは頻りの意だが、風霧であらう。」

「四寸流<sup>シキル</sup>」の寸は万葉仮名で甲類、風霧の「奇里」などは乙類。露伴は「上代特殊仮名遣<sup>14</sup>」をどう見ていたのであろうか。

○シグレ【「シグレの語はシ即ち風、クレ即ち暮れと説くのが古説であるが、或は風狂ひの転から、その風に伴つて忽然として降るのをいつたと解しても不当ではなからう。動詞になつてシグルといふ場合など、殊に風狂ひの方があつてゐると思へる。」

万葉集卷一 82、雑歌、うらさぶる情<sup>こころ</sup>さまねしひさかたの天<sup>あめ</sup>の四具礼<sup>シゲレ</sup>の流らふ見れば

同卷十 2180、秋雑歌、九月<sup>ながつき</sup>の鐘礼<sup>シゲレ</sup>の雨にぬれとほり春日の山は色づきにけり

「倭名抄<sup>15</sup>に霖雨や小雨を直ちに之久礼となすは精しからざるものである。」

○シブキ【「風の為に水が激して起ることで」（風吹とするものか）

新古今集卷六 556、冬歌、家経、高瀬川しづくばかりにもみぢ葉の流れてくだる大堰川かな

清輔集<sup>16</sup> 215、霜枯の蘆間にしづく釣舟や心もゆかぬわが身なるらむ】

○シナト【『延喜式<sup>17</sup>』（延長5（927））の祝詞「六月晦<sup>みなづきのつものおほはらへ</sup>大祓」の「科戸<sup>シナト</sup>の風」の一節。また、天野信景

『塩尻<sup>18</sup>』「祓の詞に級長戸の風といふを西北の風なりといふ」、

源順の歌<sup>19</sup>（夫木集）7762山の端を科戸の風は吹はらへかたぶく月やしはしとまると】

○シナトベノ命<sup>シナトベノミコト</sup>【『日本書紀』神代上の国生みの段「一書に曰く」とある風神の名「級長戸辺命」・「級長津



彦命】

○アナジ 【「アナシの転」。以下、風名がサ行とその濁音にかかわること分明】

○ツムジ 【「ツム即ち集まりたる、ジ即ち風の義」。(例歌、正しくは卷二199か)

万葉集卷一、挽歌、人麿長歌、み雪降る冬の林に飄ツクツかもし巻き渡ると念ふまで】

つぎの「ヤマジ」以下、口語や方言に及び、上方・江戸期の俳書・方言辞書の類を引く。

○ヤマジ

○ヤマセ

○ナガセ 【風俗文選卷之二「李由の湖水賦」】

○カゼ 【沖繩語、カジ。万葉集卷十四3453、雑歌、可是カゼの音の遠き我妹が著せし衣袂きぬの行くだり糺まよひ来にけり】

○アナゼ 【越谷吾山の物類称呼、畿内及中国の船人のことばに西北の風をアナゼ】

○ヤマゼ

○ヤウズ 【物類称呼、播磨辺又四国にて雨を催す風】

○イナサ 【俚言集覽、東南の風、市の菴24連句第四、風はいなさに日和かたよる、洒堂】

以上は「シ」の系列。つづいて露伴は「チ」の系列をあげている。以下は引例とおもな文辞とを【】内に追  
い込みにして抜いてみよう。

○コチ 【小風の義といふ、東風、万葉集卷十2125、秋雑歌、春日野の萩し散りなば朝東アサコチの風に副たぐひてこゝに散り  
来こね 拾遺集十六1006、雑春、こち吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな】

○ハヤチ【早風である、神代紀下、乃ち疾風<sup>ハヤチ</sup>を遣りて戸を挙げ天に致さしむ。】

○ハガチ【江戸の語にて西北の風、ハガツは蓋し放つ<sup>ハガツ</sup>の義、山家集716羈旅歌、いらご崎にかつを舟ならび浮きてはがちの浪にうかびてぞよる。】

○チギ【古代建築に於て屋根に交叉したる木を置いて風の為に吹き剥されることを防ぐ木、即ち風木】

○チル【風によつて物の散らさるゝをいふ。陽によつて乾すをヒル、雲によつて曇るをクモル、チ即ち風を活かせた語】

○チリ【塵。前条の義によつて散乱したる物をいふ。】

○ヒカタ【万葉集卷七1231、雑歌、天霧らひ日方<sup>ひかた</sup>吹くらし水茎の崗の水門に波立ち渡る】

○ハヤテ【ハヤチの転訛で疾風の義、竹取物語、風吹き浪激しけれども雷さへ頂に落ちかゝるやうなるは龍を殺さむと求め給ひ候へば斯くあなり、疾風も龍の吹かするなり。】

○トイテ【風俗文選】

○アラチ山【「越前・近江の国界にある愛発山<sup>アチラ</sup>は、アラシ山・アナシ山の場合の如く風称を以て名<sup>なづ</sup>けたのである。塩尻<sup>25</sup>、令三関の義解の受印本あやまれり、愛に作るべし、愛発をアラチと訓ず、三関は伊勢国鈴鹿関、

美濃国不破関、越前国愛発関也。】

○ハヤチネ山<sup>サン</sup>【奥州の早池峰山<sup>ハヤチネ</sup>は、海上より見てハヤテの出る山である。】

「コチ」・「ハヤチ」とも『時代別国語大辞典 上代篇』の用例とかさなる。「ハヤチ」の項は『日本書紀』

卷第二、神代下の天稚彦の段。「ハガチ」の項で露伴は、ハガツを片仮名表記であげているので、ハガツ・ハナ

チに〈放〉〈風〉の意を共通に感じ取っていたようである。南伊豆の波勝など、民俗・方言の視点は「アラチ山」「ハヤチネ山」の項にもうかがわれよう。「令三関の義解の受」は、養老令の三関にかんする官撰注釈書『令義解』<sup>26</sup>の文字が天野信景の見た版本では「受発」となっているが「愛発」に訂正すべきだ、と随筆『塩尻』にあるというものである。なお、ハヤチネについて芭蕉七部集「炭俵」の桃隣の句を評釈するさいにもふれている。露伴は上方・江戸期の随筆類・方言、俗語の辞書・俳諧の雑書などからもその知見を養っていたようである。

#### 四 近似音・本具音・ン

##### (一) 近似音

「近似音その他 ―音幻論の一部―」は昭和十九年十月一日、文芸雑誌『三田文学』19巻8号に「露伴学人述」として掲載された。八月一日の「し」と「ち」 ―音幻論一部―につづく掲載である。

八月の号の論がいきなり具体例から始つたのにひきかえ、露伴はおもむろに「言語学」「音韵学」の論から説きおこす。ただし、その関係は説くけれども定義には及ばない。

言語学と音韵学とが別であるのは、それらの対象である言語と音韵とが別であるのと同様である。

露伴独特の用語と比喩であろう。「畢竟言語と音韵とは一枚の紙の表裏のやうな関係」とあり、「耳があつて音韵を取り、標記する文字があつて言語も留められ」とあるから、言語は文字にかかわり音韵は耳にかかわる、としたのであろうか。言語学は文字、音韵学は音韵、という振り分けは今日のみならず、一九四〇年代当時の「言語学」一般のありように照らしても普通ではあるまい。二十世紀中葉までの世界の言語学の大勢は、欧米の比較

言語学をはじめ音韻論を抜きにしては考えられず、文字論<sup>(27)</sup>は立ち遅れていたとされるからである。露伴のいう「言語学」とは、歌学・国学の系譜にある在来の学をひとからげに称したものであるうか。「近似音」「本具音」もわからない。論を追いなから考えたい。

しかし、音韻をめぐるその観察には行きとどいたものがある。露伴はたとえる。

さて、耳で聴くのと、それを口で復源すると、目でまた現出するのは三つが一つになって恰も三金輪のやうな組織であるが、

ここにいう「三つ」とは、耳・口・目にかかること確かであろう。ただし、それが一人物内のしくみをいうものか、話し手―聞き手の一人称・二人称関係をいうものか、音韻―文字をめぐる社会の雛型をいうものか、どのようにも取れるたとえではある。が、唇音・舌音の例をあげてそれらの用語に距離をおき「器官的な分け方」としているから、人間二人を雛型にして音韻―標記のしくみに、露伴のいわゆる言語学とは異なる見方を打ち出そうとしたものようである。「近似音」という耳なれぬ用語を掲げたゆえんでもあろう。

露伴は実例で話しを明けようと考え。ミゴヒ・ネコを例にしてmとn<sup>(27)</sup>とが近似する音であることを示す。まず、「ミゴヒといふ魚がある。」と切りだし、古辞書から引く。

菅原為長の字鏡集<sup>(28)</sup>

鮠ミゴヒ

狩谷掖斎の箋注和名抄<sup>(29)</sup>

鮠、美、今俗呼<sup>ニ</sup>美古比<sup>一</sup>或譌呼<sup>ニ</sup>爾古比<sup>一</sup>

谷川士清の倭訓栞<sup>(30)</sup>

近江の湖にニゴヒあり、よく鯉に似たるなり一名まじかといふ白魚なり、

「手近の辞書を検すると」とつづける。

言泉<sup>(31)</sup>

ニゴヒの転訛

大日本国語辞典<sup>(32)</sup>

ニゴヒの異名

大言海<sup>(33)</sup>

ニゴヒの訛

この「ヘミ―ニ」という近似は、いわゆる鼻音にかかわる現象であろうか。概念で分岐的に仕切るよりも音韻的<sup>(34)</sup>理念によつてさばいた方が確かで穏当ではあるまいか、という。

しかし、このあと露伴の口授はたどりにくい。①口で発し、②耳で聴き、③口で復元する、――この三段階のどこで「ヘミ―ニ」両音は相異なり、近似するものか。①の段階とも②の段階とも受け取れるが、③の段階でおおいに近似することは確かであろう。

他の例として露伴は「猫といふ語」をあげる。

邦語でネコといふのは蓋しその動物の鳴声がネと聞えるよりしてネコと言ったので、コは他の動物に弘く用いられている意味と同じであるに相違ない。

音韻の近似から推定し、貝原益軒『日本釈名』<sup>(35)</sup>や源順『類聚和名抄』の意味からする語源説を「果して如何なるものであらう」と見ている。

鳴声をその動物の名とするのは言語史上珍しからざる例、として他の方面に耳を傾け、その標記の文字に目を転じる。

支那に於ては通俗字書に音 miao 又は茅 mao

西洋では猫の鳴声は英語 miaow 仏語 miaou 独語 miau

つまり我が国ではn系に聴き支那西洋ではmの系統に聴く所から、かういふ相違も生じてくる。猫の本当の鳴声はnであるか、mであるか、「猫に聞いてもニャンとも分るまい。」

元来n系とm系とは近似音であるからして、といい、「我が国においても猫の鳴声をn系にのみ聴いていたのではなくm系に聴いてゐた証拠もある」として、古歌をあげる。

伊勢物語の業平の歌の都鳥 「都の鳥の意味ではなく本来はミヤと鳴く小鳥の意味」

万葉集卷二十四<sup>462</sup>、大伴宿禰家持 船競ふ堀江の河の水際に来居つゝ鳴くは都鳥<sup>36</sup>かも

露伴は語義にからませた語源説をとらない。「コドリはマシコドリ・ヌエコドリなどと同じで」、「ミヤはその鳴く声であろうという。例証として、この鷗の類を処によっていろいろに名づけている典拠をあげる。

小野蘭山の本草綱目啓蒙<sup>37</sup> 鷗を筑前にてネコドリ筑後にてネコサギ上総にてウミネコ武州本牧にてハマネ

コとよぶ、

鳴く声が猫に似ているから猫の称があり、その時代の普通の人は猫の声をミヤと聴いていた。つまり西洋支那のm系とも一致する、という。

音が幻出のものであることはまず理解されなければならない、と露伴はここで念をおす。n系・m系が近似音である類例・傍証としてさらに『徒然草』第一五九段や伴信友『中外経緯伝』<sup>38</sup>をひく。『徒然草』の蜷はミナともニナともいので、「ニナを誤りとするのが実は誤りなのである。」<sup>39</sup>といい、『中外経緯伝』任字の(ニン・ジン)や任那(ミマナ)・壬生(ミブ・ニブ)を引く。さらにウミのm系ムについて『常陸風土記』・『万葉集』にあるn系海上<sup>40</sup>ウナカミの訓、あわせて枕詞のn系ヌバタマとm系ムバタマの例をあげる。

(二) 本具音

「本具音」という耳なれない用語は、「近似音」を論じてウミの例におよんだ時に一度口にしており、「本具音の事は後段にのべよう。」とことわっていた。あらためて「本具音」という題をかかげて露伴はつぎのように定義している。

本具音といふのは前人が既に道破してゐるか否かは知らぬが、或音が発しられる場合の直前にその音が有つてゐる性質よりして発しられる(ヨウビ)の音をいふので、唇音のマ行バ行パ行等の音が発しられる時、その発音の前駆をなす音を仮に名けて本具音と言つたわけである。

五十音図の縦・横になじんだ目や直音・拗音(41)を峻別しようとする観念からは出てこない感覚であろう。

例へばマ行のマの如きは、マと明かに発音される前に準備的の如くウもしくはムが発しられる。

として、梅・馬のほか如来・乳母・宜を例にあげるから、日本語漢字音だけの問題でもない。梅の場合、由来の解釈は随意であるが、「メの音が出される瞬間に極ムにウもしくはムが聴取られる」。そこでウマ・ムメ両様の記録が行われ来たものであろう、という。

万葉集卷五851、我が宿に盛に咲ける牟梅ムメの花ちるべくなりぬ見む人もがも

几董編の蕪村句集卷之上(42) あらむつかしの仮名遣ひやな字儀に害あらずんばア、ままよ、と詞書して、梅咲きぬどれがむめやらうめじややら

牟梅は従来ウメの書誤りであるともされている、と述べ、蕪村の句はウメ・ムメの仮名遣いの詮議にやかましい「当時の学界を揶揄した一句」と露伴は注し、字義にとらわれて「ウメは烏梅ウメの字音であるとか熟実ウメの約転で

あるとかいふ説も如何であらう」としている。「鉄の定規で物を定めるやうに」(韻) 分岐的に「窮屈な議論」(シとチ) を立てるまでもあるまい、と考えていた露伴の像がここに浮かびあがってくる。「我田引水の論」(韻) で争っても際限がないとする露伴の像はみごとだが、しかし風変わりでもあろう。

梅の朝鮮音<sup>32</sup>や支那音の<sup>33</sup>其他から邦語のそれが出て来たのかも知れないが、何しろ論究しても論究しどころの無い原因であつて、ウもしくはムをメが有つてゐた自然の本具の音であると言つた方がよいであらう。

梅・馬など上代の邦語の韻と朝鮮音・中国音など字音のあと、字訓「孫」を古くウマゴともムマゴとも両様にいつている、とした縁からいきなり身近な話になる。

飯をママといふ。これを小兒語<sup>45</sup>でウマウマといふ、そのウマウマは本来マの有つてゐる本具音が、小兒の弛緩せる口脣の作用<sup>44</sup>によつて却つて明かに生じた音であると見ても差支あるまい。

露伴一流の思考と観察であろうか。小兒の口脣の働きから、そのまま梵語や仏教音楽におよび、声明<sup>46</sup>の書『魚山薑芥』にニョライと明記された「如来」、すなわちナ行の拗音に本具音を聴き分けている。露伴の音幻論は、どうやら五十音図の縦の行・横の段の概念ではなく、直音・拗音の価値観にもかかわらない。むしろ進んで鼻音や拗音などの幻出する世界に遊ぶかのようなのである。

古今和歌集卷五429、文屋康秀 吹くからに秋の草木のしをるれば宜山風をあらしといふらむ

万葉集卷五831、春なれば宇部も咲きたる梅の花君を思ふと夜寝<sup>47</sup>も寐<sup>48</sup>なくに

卷六1037、今つくる久邇<sup>49</sup>の王都<sup>50</sup>は山河のさやけき見れば宇倍知らすらし



(三) ン

「近似音」「本具音」は、ともにn系・m系の韵にかかるところがあった。n系・m系を含むそれらの現象に、露伴はかりに五十音図格外の片仮名「ン」を充てているが、この文字にてこずった気配がある。「何とよむのか私には分らない。」——字源は牟の字の下をはぶいたムがンの字であるという。ムならば止る音とどまであろうが、今日人々は撥ねる音にもこの字を用いている。ナ行n系ともマ行m系ともつかず、一字単独にはウンというように読みきたってもいて「随分困った字」であり、我が国での最古例をあげるに困難なくらいである、という。古くはンをニと書きもし言いもしていた、として例歌をひく。

古今集卷第435、物名、くたに、僧正遍昭 散ぬれば後のちは芥に（苦丹）なる花を思ひ知らずも惑ふ蝶かな  
441、しをに、読人知らず ふりはへていざ故郷の花見んと来しを勻ひ（紫苑）ぞうつろひにける

444けにごし、矢田部名実 うちつけに来し（牽牛子）とや花の色を見ん置く白露の染むるばかりを

この字は「ム・ウ・ン・ニ等の音の性質を兼ねてゐる字」とかりに認めておくが、として露伴が問題にしたのは当の「ンの音」である。「鼻腔音」とこのあと露伴はよんでいる。

このンの音は邦人の発音するもののうちですこぶる幻性をもつてゐるもので且異様な性質をもつてゐるのである。

今日、大型の辞書が「ン」の項にそれ相応の説明を費やしていることは周知のことであろうが、当時の世情を思いたい。大正から昭和にかけて、ヨーロッパの音声学の影響を受けつつ音声の研究も盛んになり、今日その時期の代表的な著作にふれることができるが、敗戦後は小学校におけるローマ字教育の採用に伴い、日本語ローマ

字綴法についての論議が起り、問題解決のために、服部四郎を中心に日本語の音韻論的考察が進められた。大戦中、アメリカで開発された sound spectrograph の導入によって、昭和二十年代から三十年代へと音声の音響学的研究が急速に進み、とくに R. Jakobson らによる音素の弁別的特徴の研究<sup>49</sup>が大きな刺激となつたされる。露伴の「ン」はその水脈のどの辺にあるものか。

露伴はいう、この音は口腔の運動を閉塞せしめても出し得る音で、母音とも子音ともいいがたい永続性を有する音である。母音の外は永続性をもたないすれば、この鼻腔音は特異性の一音であるといえる、とする。露伴は「或地方と他の地方との言語の差」なる言い回しで方言という用語を避けているようであるが、「自動車をズンドーシャと発音する」例をあげて本具音にふれつつ、「元来内気を外気に投出すのに勇敢なる能はざる寒冷の地方の人の口腔を開かずして鼻腔より発音する習慣<sup>50</sup>」と解して、東北方言のために弁じている。それどころか、「かういふ理合で言語は変化して行くのである」ともいう。

付け加えて、「まだ一つ別に特異性を持つ奇異なる音がある」と露伴はいう。シは子音ながら永続性を有する。シの近似音であるチにはこの永続性がない。スヤズともちがう。シの濁音と普通に称しているジも、摩擦音として永続性がある、という。

濁音といふことに触れたが、音に清濁<sup>51</sup>と言ふことは精しからざる用語と言ふべきで、我等は清音濁音もしくは半濁音といふやうな用ひざまをしたくない。清濁といふよりは軽重と言つた方がよい。

## 五 韵

「韵——音幻論の一部——」は昭和二十年一月一日、雑誌『文藝』2巻1号に掲載された。同誌は昭和八年十一月に改造社がプロレタリア文学運動の退潮をしておに創刊して「文芸復興」の新風を吹きこんできた文芸雑誌であったが、昭和十九年に東條内閣の圧力で改造社が解散して河出書房が買収し、十一月に創刊号を出したばかりであり、まえの掲載誌『三田文学』がその十一月で終刊になったあとの発表誌である。「韵」の一篇も小石川の自宅で口述したものか。ひきつづき同誌は露伴の口述を掲載して敗戦後におよび、「聯音」をもって『音幻論』収録の諸篇を終了する。この間に露伴は転居をくりかえし、小石川の書齋も資料群も空襲で灰にしている。そのこの『文藝』が戦後派文学の拠点になったことは周知のことであろう。

各篇を発表するあいだに、露伴は表記法や用語の大枠を説明しておこうと考えたのではあるまいか。「韵」の一篇は、その発端で〈韵〉と〈声〉とを立てている。

先づ定義といふ程のこともないが、声と韵とのことを概略理解して置いて、かういふ意味で韵及び声といふ語を用ゐるといふことを知つてゐて貰ひたい。

ただし、五十音図というものに露伴が距離をおいていたことに注意しよう。

我々は兎角に五十音図といふものに捉はれて話をするので、その利も受けるが弊も受けてゐることが少くない。しかし今は一応、五十音図に即いて声韵のことを言ふ。

つづいて「ア行すなはちアイウエオといふ音のことは、一切の声音の元もとのやうなものであるからこれを母音と

称へてゐる。それは暫く扱置き」といそぎ言い継いでいるから、露伴は五十音図や母音・子音といった用語を避けようとしたようである。

そのうえで、露伴は「異声同韻」「同声異韻」という言い方を繰り出す。すなわち、「キといふ音とりといふ音」は異声同韻であり、「サとシといふやうなのはs系の同声で」「同声異韻であるとする。一見、これは五十音図の縦の行と横の列とを随意に操作する鎌倉期の語源辞書『名語記』などの延約説を思わせる。しばらく露伴の説明を追ってみよう。

その外に韻といふにも少し困るが外のは少しく様子が違ふもので、ンといふのが下へ著く音があり又ムが著く音がある。かうした場合のン・ムは先づ韻と同様なもので

とあるから、〈韻〉には「ア・イ・ウ・エ・オ」のほかに「ン・ム」が加わる。さらに、

このンが大きく著く場合と小さく著く場合とがある。その外にルといふのが小さく著く場合もある。支那流に入声といふのはフ・ク・ツ・チ・キ・ル・ムといった韻が極小さく著くので、

とある。つまり露伴のいう〈韻〉は、p・k・tの入声をも含めることになる。この章の終りちかくで露伴が言明したことを先取りして引いてみよう。

前にも言つた通りアイウエオの五音及び仄韻のフ・ク・ツ・キ・チ等を韻と言つてゐるのである。

日本の漢詩作法でいう詩韻の入声「フ・ク・ツ・キ・チ」が思いあわされるが、さきに触れた「ン・ム・ル」をここに加えれば露伴がいう〈韻〉の全体に相当するだろう。<sup>52)</sup>

で、話は日本語漢字音の入声のことに及んでゆく。

我が言語社会では入聲をも平聲上聲去聲にして用ゐることを常とし、且さうすることを上品な国振と考へてゐる。この事は在来の普通の国語学者が見逃してゐて評論も少い所の事実である。

いや、入聲の〈韻〉を「在来の普通の国語学者」のように見逃していたのでは、「音と音が繋がる場合の謂はゆる聯音法の行はれる所など」まったく解釈がつかない、「随分むずかしい声音言語の議論」になる虞おそれれがないではない、という一。

ここにいう「在来の普通の国語学者」がなにを指すのか、はっきりしない。m・nを述べた『男信』の東條義門などを含むのかどうか。露伴の言辭にはこの種のあいまいさが、間々うかがわれる。しかし、「序」において「言語学その他で諸先輩が色々な優秀な意見を披瀝してゐられた」と述べているのに従えば、在来の〈国語学〉と明治期以降の〈言語学〉とをかりに使ひ分け、しかし当時の学界は学界とし、露伴としてはあえて独自の用語を立てたということになるか。

支那文字が我が国に普通に用ゐられている場合に、支那の字が持つてゐる入聲の韻53を大いに距離のある平上去と変化させ発音することが一般の習となつてゐるのは何とも不思議な現象であるが、

と露伴は首をかしげ、日本古来の「富士」と「浅間」(朝熊山・阿蘇・安曇あづま・吾妻・アガツマ・アヅマ)といった地名の声音について、入声と平声・上声・去声とを例にあげる。

日本第一の名山をフジかフヅジかと考へられない位の愚かな声音の研究で、どうして満足な結果が得られよう。

また、在来の意義に偏した説明をいましてここでも繰り返して言う。

従来の人々はすべて義によつて説を立てゝゝゝて、音そのものによつて観察をなしてゐることが稀である。

つまり、「義によつて説をなすことは預かる」という立場から、音の転変しゆくことをもっぱら考えてみるために〈韻〉と〈声〉とに大体の定義をほどこしてみたのだとする。ここままで「韻」の一章はおわつたはずであるが、平上去入の四声にふれた機縁から露伴の口述はしばらく中国と印度の音韻にもついやされたので、われわれはそこに露伴〈声韻〉観の広がりを見ることが出来る。

「支那は大体文字の国」「印度は言語の国」「我が国は印度と似てやはり言語の国ではあるが、単音の国である支那が介在してゐて」と、三国の言語事情を露伴は概括する。〈文字・文章〉と〈言語・声韻〉とを使い分けているようであり、前者はいわゆる書き言葉の系列、後者はいわゆる話し言葉の系列に近いものかと考えられる。

支那で音韻のやかましい事を言ひ出したのは印度の仏教がその地へ流れ込んだ後、即漢の末からである。

露伴の説をかりに要約して漢末以前を①とし、「古い詩経などの韻」「漢以前の古い音韻」「古韻」とすれば、つぎに②「一般は六朝・隋・唐から漸く定まり玉篇・唐韻出づるに及んでそれが公認されたやうなかたちをなし、唐詩に用ゐられた韻」「後世の韻」「李杜の用ゐた詩韻」があり、さらに③「元が支那の北方の人々を以て成つたので自然北方の音が、従来の唐宋の音韻を通俗のものに於ては圧倒する気味があつた」「元の戯曲に用ゐた詞の韻」がある、ということにならう。

故に支那で音韻を論ずる場合、古韻を論ずるのが一つ、詩韻を論ずるのが一つ、詞の韻を論ずるのが一つとなつて来たのである。

まことにおおまかながら、上古漢語・中古漢語・中世漢語という段階分けをする中国音韻論<sup>55</sup>の現状に照らして、

まずは穏当な見方であり、③の元曲(66)にふれた点がいくらか露伴独自の視点といえようか。たまたま呉才老・朱子・顧炎武の名が出たところに露伴の蘊蓄がうかがわれよう。呉械ヨク、字は才老あざな、十二世紀は宋の建安(福建省)人、『韻補』五卷などの著があり、宋以後、古韻を言うものはこの書にはじまっているといわれる。叶韻説(67)は協韻説ともいう。協韻説を大成したのは宋の呉械とされ、その叶韻の説を「大儒の朱子なども用ゐたのである」と露伴がいうのは南宋の朱熹の『詩集伝』・『楚詩集註』にあたるものである。叶韻の説の「破るゝに至つた」と露伴がいうその端緒をなしたのが清初の顧炎武の『韻補正』一卷などであり、彼は清朝一代の学問を創めた学者の一人とされている。「破るゝに至つた」のは結果であつて、顧炎武は呉才老の功績を高く評価して『韻補正』を著わしたといふところが穏やかであろうか。

呉械から顧炎武に至る音韻研究をとおして見えてくるものが露伴にあつたのかもしれない。たとえば「古今に違いありかつ古も今も正しい」とする立場、最良のテキストを求める顧炎武ら清朝考証学の学風、叶韻説のこちたき論議と抵抗、ひるがえつてわが鎌倉期以降のこちたき音通説の有様、玉篇・唐韻に先立つ「古代の韻がおまか」であつたこと、音韻における嬰兒や方言の意義、など。これらは推測にすぎないが、明朝の遺臣として生きた顧炎武に私淑するものが露伴にはあつたようである。

しかし、中国の韻そのものについて露伴の説明はすこぶるあつけないものである。

元來韻は均で、凡そ似たやうなものに近いやうなものを一括して部分けをして、東・同・風は一東の韻、陽・光・芳は七陽の韻といふやうな分立をしたもので、これらの字の調子が凡そ相似てゐる所からして一東・二冬とか七陽・八庚とかの如くに分けたのである。

読者に不親切、という印象はまぬがれまい。中国の韻図、『韻鏡』や『広韻』<sup>58</sup>ないしは平水韻の一覽表を説明しかけてやめた気配がある。たとえば、悉曇学<sup>59</sup>の仕組みを漢語の字音に活かして口むろの部位をほぼ前のほうから唇音・舌音・牙音・齒音・喉音・半舌音半齒音と順に右から左へと横に配する、平・上・去・入の四声それぞれに代表的な韻字を示し、韻字ごとに口むろの開きの広い直音から狭い拗音へと配して各四等に分かって縦に計十六等を設け、――と口述しかけてにわかには店仕舞いにかかったのではあるまいか。空襲に見舞われはじめた帝都で、乏しい誌面が相手である。すでに発表した「シとチ」「近似音」などのかねあいもあろう。露伴は邦語の〈音幻〉へと話を急いだのかもしれない。

少なくとも露伴の〈韻〉の説は、悉曇学や中国の音韻史や漢字音にわたる視野からなされたようであり、なお付け加えれば、入声にかかわるフ・ク・ツ・チ・キの類のほかルと鼻腔音にかかるン・ム<sup>60</sup>とを〈韻〉に準ずるものとしていたことも確かであろう。

露伴の口述は邦語の音韻の時代区分からはじまる。まず、

我が国に於ては印度・支那のそれが小移<sup>こうつ</sup>しになつてゐる傾があつて、

と概括したうえで、露伴は「古代すなはち奈良朝以前の音韻」「唐の文化が頻りに加蒙した奈良朝の音韻」「平安朝、鎌倉頃の音韻」<sup>61</sup>「日本の戦国時代に起つて来た俗の音韻」という風にくくっている。

仮名遣<sup>62</sup>の論はそうした新古の間に生じたとし、「鎌倉時代の歌詠が用ゐた仮名遣」「分らない仮名遣即ち分らない音韻遷移」「徳川の一時期に於て復古運動が起り」「現代は再びそれに據つていくらか正しきに還り古に就く」「一部では便宜を第一とする主義から発音式に従ふといふ用法」などを挙げる。露伴は明治期からの「我田引水」



「歴史主義と現在主義との争ひ」には、それだけの意義がないかと思うと述べる。

言語の変遷する所を掴みたいのが音幻論の生ずる所以で、言語が金石に彫刻したもののやうにその俛永存するものでないのは、恰も幻相が時々刻々に変化遷移するものである如く生きて動くものである。そこで音幻の二字を現出したのである。

しかし、と露伴はつづけている。「幻と言っても法無く動くものではない。」「法と物と俱生のもの」「俱生の法則につきて先づ觀察を尽したいのが本意なのである。」

章の結びに露伴がいうアイウエオの五つの韻の説は、口むろの動きを内省している点ではごく常識的であるが、アイウエオそれぞれに関連して「意が生じてゐる」と言いきるのは、素朴な音義説ではないものの、いささか危うい感じがする。しばらく露伴のあとの説をまちたい。当人も「かく母音の一つ一つに就いてその意義を論ずることは大胆なわざであるが、大体に於てこれを認めるがいゝだらう。」<sup>(63)</sup>というとおりでである。

アは全体発生の意、ウはそれに反して収め、閉ぢ、止る意、イはつき進む意、エはつき進むのではなく命令するやうな意、オは送り出し、応ずるやうな意をもつてゐる。

## 六 音の各論

「音の各論」口述筆記は昭和二十年二月一日から雑誌『文藝』2巻2号に載り、同誌一月号の「韻」にひきつづき二月号・三月号・六月号・八月号・九月号と連載された。仮に(一)(二)(三)に分かつて吟味しよう。この間、一月末別居の妻千代子の死、三月末小石川表町から千代子の旧居長野県坂城へ疎開、五月末小石川罹災、

八月敗戦、十月伊東へ転居、などがあつた。

(一) アイウエオの遷移

前号「韻」の終わりにアイウエオの質を言つて「次には音の各論に移らう。」と結んだのをうけて「音の各論」はアイウエオの五つの音が遷移変幻してゆくところを述べる。が、始めのところがよくわからない。

アといふ内にも平・上・去・入の四声の別があり、それから又種々に変化して行くその変化がア一つについても先づ四つある。すなはちアがイになりウになりエになりオになる。

まず、邦語における平・上・去・入の四声なるものがわからない。いわゆるアクセントの平板・上昇とか、撥音(ン)・促音(ッ)とかにあたるものであろうか。四声のことはしばらく措いて、アがイ・ウ・エ・オの四つに変わりうることを「内遷」と呼んだことは確かであろう。イウエオについても「内遷」がいえるから「ア行五音には内遷二十」になる。ほかに例えばアー・アン・アツ等は「内遷」ではなくて変幻することと考へたようである。インド風の悉曇字母表の摩多(mata 母韻字)のほかに遍口声(ヘンクシヨウ)(半母音 ya・ra・la・va 隔舌音 sa・sa・sa 重字 lam・ksa)あるいは中国音韻学の陽類(鼻音におわる韻尾)や入声(内破音の韻尾)に類するもの考へていたのであろうか。論議の要点を番号で示そう。

① アがオに変ずる場合は比較的多い(イ・ウ・エはよい少い傾向)

【奥義・鸚鵡・扇・枌・棟・逢坂・近江・青梅 素襖 伊勢物語九十三段 あふなあふな思ひはすべし 葵・障泥 煽グ・仰グ・逢フ・合フ・饗フ 足利期に成つた舞曲 知らぬかえ、とか、取つてくれうぞえ、とあり 今はカイ・ゾイ 稀な音転移の一例】

② イとエとは内遷が容易

【越後 多くイ・エを混淆<sup>(65)</sup> 肥をコイ 鮠はハイ・ハエ 尿はイバリ・エバリ 賽・才のサイをザエ イヌゴといふ内腫の一種をエノゴ 榮螺 サザイ 苛・辛・偉などの義を有するエラシ 刺 イラシが転じた】

③ 息をいふ古邦語がイ 尖状に外へ衝くといふやうな気味のある音の質から

【イブキは氣噴 駢は氣響の約 言フは氣経 生キは人の氣を存する 氣絶ゆれば生絶ゆる 命は即ち氣ノ内 氣息はイキ 癒ユ 息延ユの約 憩フは氣生フ 萎頓困敝のイキツクは氣尽ク イキゴムは息籠ム 人の氣の騰るをイキル物の氣ノ騰るをも配ルイキリタツ イキマク イキザシ イキホヒはもしくは氣暢もしくは氣榮 イカルは氣上ル 古書の挙学論 イブセシは氣噴狭シ 挙痛論 イキドホリは イキモトハリの約でもあらう 巖シ・巖ツシ・巖メシ・喈ムの類の語 皆氣息に關してゐるかも知れぬ 韓嬰の伝 色酒 財氣 イキノ荒イ 威焰の激しい 古い語にサカガリといふのも酒息騰の略 オキナガの術 オキは氣息 謂はゆるオキナガは単に氣息長とのみしては面白みは幾分かは失ふ】

④ イのウに變る語例

【魚は古言イヲ 茨はイバラ・ウバラ 又ムバラとも 万葉集卷二十東歌<sup>2352</sup>、道のべの宇萬良の末にはほ豆のからまる君を離れか行くかむ 魚の名のウグヒはイグヒ美しはイツクシとも 周章の義のウススクはイススクでも 欠脣は兎口の義 抱くはウダク 動くはイゴクともオゴクとも 柳亭種彦の用捨箱<sup>(66)</sup> オゴノリまたオゴ 播磨辺ではウゴ またエゴノリとも 鳥のウスベはオスメで又ウスメとも 草のウハギはオハギとも 茶受をチャオケ ウ列の軟い音がア韻の音に従ふ時は引音のオとなる首・草子・峠・八日 手水・繞鉢・

妖怪・堪能・日東・吐月峰等のウ

⑤エはイと内遷し易い

【草鞋虫のオMEMシをエMEMシと】

⑥ワ行音はア行音と非常に近似音 アイウエオからワキウエヲは生じ、若しくはアイウエオはワキウエヲから元化して生じたといつてもよい。

⑦ヤイエエヨもこれと同じ道理で 故にア行がイの加被によつてヤ行音となつたことは明か 或は又ヤイエヨが元化した場合にアウエオになつたとも

⑧ヤ行音はワ行と同じくア行の親声 同胞音と呼んでもよし

【連枝同胞 場合

バアイとも

バヤイとも

バヤイとも

吾をアとも

アレとも

ワタクシとも

アタクシとも

辺をア

タリとも

ワタリとも

古言アガツは

頰ツと

同源の語であらうか

沢庵・具合

タクワン・グワイ

王・皇・

横・枉・往等の字音は

ワウ ヲー又は

オーと発音 動くの仮名は

カタリなす

犬を古くエヌ

苺の人が越後を食ふ

赤松宗旦の利根川

凶志卷一

恵具

その根は

薺くして食

ふべからず

エグ・キゴの

変化 慶長の

易林節用集 書院を

大軽率鳥

於保乎曾杼里

現を遠都豆

朮を宇家良

兎を乎佐藝

烏骨鶏を

ヲコツケイ

手斧を

テウノ

【

⑨ヤ行の例

【煤デルをウデル

族を古くウカラ

亜鉛鋳を邦語でヤニ

樹から噴き出るヤニ

や烟草のヤニ

羽後の阿仁

鉾山は或は

石炭を伊賀あたりでウニ

芭蕉の句142の、

香ににほへうにほる岡の梅の花、

の詞書

酔がヨヒ

【

蜻蛉のヤンマが古名エムバ 霽をミヨ】

⑩ヤ行の内遷

【此奴・其奴・彼奴がコイツ・ソイツ・アイツ 生憎がアイニク 彌がイヨと 宿り木の類をホヤともホヨとも 様・陽・洋・養の字音のヤウがヨーと 左様ナラがサヨナラ サイナラ ヨマヒ言 世迷言 病言 万葉集の東歌<sup>3423</sup> 雪を与伎 眉・繭を麻欲<sup>998</sup> 通ハムを加由波牟<sup>4324</sup> 昨夜のヨベ・ヨンベがユベ・ユウベ・ユンベ 狭読の布 御伽草子の物くさ太郎<sup>70</sup> サユミのかたびら 今はサイミ 萌黄がモエギと訛る 東京語で 樋をトヨ 尤・右・有・友・憂・宥・幽・悠・誘・猶・遊・郵等の字音 ユーと発音 言フ ユーと発音 夢は古くはイメ 六日はムカがムウカとり、ムウカがムイカと 又ムユカ・ムヨカとも 逆に今は歪ムをイガム ユスブルをイスブル眉毛をマイゲ アユナメをアイナメ 行ク ユクトモイクとも 古くはイを冠してイ行ク 仙覚<sup>71</sup>以来発語の辞と称してゐるが イは無意義に顕発 他に意義はない イ坐ス・イ立ツ・イ廻ム・イ漕グ・イ這ウ・イ吹ク・イ舐ル・イ隠ル・イ拾フ・イ向フ・イ通フ・イ渡ル等のイ 未ダがマダ嫌ダ ヤダ イの落ち易い例】

⑫ア行と音の質が近いハ行すなはちハヒフヘホの五音

【近似音 緩和 軟化 アイウエオ 返辞のハイをアイ 河原 カハハラ 菊の古名 倭名抄に加波良与毛木 新撰字鏡<sup>73</sup>には辛与毛木 露の古名フフキ タフトシ・タフトブがタットシ・タットブ フが促つて脱落 逆に牙儻<sup>74</sup>をスハヒ 誤例 ハララグは散の訓でアララグに通ふといふ説が倭訓栞<sup>74</sup>に 貝・佃・飯・鵠等のヒ 蚕・平・賄賂・水鶏・柀等のヒ 共にイと発音 家鴨 底翳・退方 ヒと発音する方が却て

異例 這入ルはハヒルかハイルか 雖はヒヒナかヒイナか 仮名遣の論 徒然草六十二段、延政門院 二つ文字牛の角文字すぐな文字歪み文字とぞ君は覚ゆる 「こいしく」とヒをイに書した例 炭俵の百韻で野坡の句<sup>2300</sup>、舞羽の糸も手につかず繰 マヒバカ巻羽の音便でマイバカ フがウ 八行四段活用の終止形は悉く然り 危シ<sup>アヤフ</sup> 埴生<sup>ハニフ</sup>・蓬生<sup>ヨモギラ</sup>・園生<sup>ソノフ</sup> 夕<sup>ユウベ</sup> 義によつて仮名遣をユフベ・ユフベ 瓜<sup>ウリ</sup>は古くはフリ へがエとなるのは語中・語尾のへの大部分、又は助詞のへはいつもエと発音 家<sup>イヘ</sup>・上<sup>ウヘ</sup>・栲<sup>クヘ</sup>・鼎<sup>カナヘ</sup>・槭<sup>カヘテ</sup> 顔<sup>カホ</sup>・氷<sup>コホリ</sup>・塩<sup>シホ</sup>・鳩<sup>ニホ</sup>・匂<sup>ニホヒイホリ</sup>・庵<sup>オホセ</sup>・仰<sup>オホヒ</sup>・覆<sup>ナホシ</sup>・直衣<sup>ナホフヒ</sup>・直会<sup>ナホフヒ</sup>・猶<sup>ナホ</sup>・遠<sup>トホ</sup>・大<sup>オホ</sup>・多<sup>オホ</sup>・朴<sup>ホホ</sup>・酸漿<sup>ホホヅキ</sup> 等のオホは発音の上はオ】  
露伴はいう、かくの如く各音が 同列のア行の音に帰するのを、仮に帰遷と名づけるのである。「さうすると八行内で行はれる内遷が二十で、帰遷が五つといふ数になる。」

⑬ 準帰遷とも言ふべき例

【箒<sup>ハハキ</sup>・蝙蝠<sup>カハホリ</sup>・河骨<sup>カワホネ</sup>をホオキ・コオモリ・コオホネ ハがオに帰した 葵<sup>アフヒ</sup>・煽<sup>アフク</sup>・尊<sup>アトシ</sup>・葬<sup>ハフル</sup>・放<sup>ハフル</sup>をアオヒ・アオグ・トオトシ・ホオル 塞神<sup>サヘノカミ</sup>がサイノカミ 下学集<sup>ゲガク</sup>に蠅<sup>ハエ</sup>をハイ、蛙<sup>カヘル</sup>をカイル 従来ウ音便といつてゐるのに、ヒがウとなり、又発音がオとなる場合 買ヒテ払ヒテ酔ヒテが買ウテ払ウテ酔ウテ コオテ・ハロオテ・コオテ マヘツギミがマウツギミ へからウになる例】

⑭ 内遷の語例 ハの韻がウと合してホとなるのは通例

【袍<sup>ハウ</sup>・放下<sup>ハウカ</sup>・方士<sup>カウシ</sup>・宝珠<sup>ハウシユ</sup>・褒美等<sup>ハウビ</sup> 這フ・延フはハウと発音 黒子<sup>ホクロ</sup> は古くハハクソで愚管抄<sup>ウツクサウ</sup>にはハハクソホクソ又はホクロと 解<sup>ホツ</sup>ル ハツル 呆<sup>ホロ</sup>・惚<sup>ホロ</sup> ホル ホウケル ホク 化<sup>ハ</sup>クといふ語と通ずる 化<sup>ハ</sup>はバケとも通じ 古くはマケであつたらしい 類聚名義抄<sup>ルイシュ</sup>には媚の字をハクと訓である ハクがホクとなつた道行

未だ定説とは言ひにくい 鰻結アフヒムスビのアフビ 普通の音使ならアウビ 寧ろ例外 蛇ヘビがへミ ハミ 剥ハグ へグ ヒも亦ホと遷る かの弟橘比売命さねさし相模の小野にもゆる火ヒの火中ホナカにたちてとひしきみはも 火中ホナカ 火影・火串・火口・火先・火照・火通・火穂・火叢 草木の穂はヒとはならないやうだが 秀ヒイヅ さうとも言切り難い ヒは小さいといふ意味をもつた音 細ホツイといふ詞とつながり、鬚ヒゲは頬毛ホケ 細ホツい毛 フがホとなる例 フグシ 鉄カネフグシ 今はホグセと訛る 幪カガフリがカガホリ 葵アフヒをアホヒ 杓アフコをアホコとも書した 含フクマルはホホマルとも 賀茂真淵78の語意の頭注に、古はフクム事をホホともフフともいへり口のホホも含むよし也 フとかホとか 膨大して大きくなつて行く意味が伴ふ ヒやへといふのとは反対の働きをなす感じ これなどは音から言ふ感じで、今の言語の意味から言ふのとは違ふ考へ所である。ハもフと同じやうな意味があり 吐ハク・吹フク 物や氣息を外に出す 内にあらしめるのは含フクム内に含んで外に張るのは膨フクル 臍のホソ又はホゾがヘソになつた例 ヘソのへ 凹コム 潜ヒツム 断言を急ぐことはできない ヒ・へ かすかになるといふ意味 潮が干ヒるとか腹が減ヘるとか 冲ヒキル 低ヒクシは退ヒクと ヒネ 微妙といふやうな意味をもつ気味 彦・姫・雛 一概に断言はできない 国の地名 比利根 芭蕉の句 879 冷やし物 礼容筆粹79 ヒヤスは切ること で 人を斬るのも 今はハヤス 聶ニヤスの字にあたる】

⑮次にハヒフヘホ「同列のワキウエヲに遷るのを往遷と名づけると、往遷が五つ 更に筋違スジカヒに往く遷移を準往遷と名づけると、これが合はせて二十 殊にハがワとなる証例は挙ぐるに堪へない程 事實は事實として認めたいゝわけである。」

【天爾波のハ 謡曲 今日ハをコンニツタと聯音法で夕に 鉢木の、宿の北面の梅は、を北面ナ の外は例

外なくワと発音する 語中・語尾の場合の例では淡・岩・川・革・際・沢・楚・俵・常盤・永・縄・庭・弱・  
童・終等 母とか専 ハとそのまゝ発音する例の方が少ない。ハが語頭にある時の例 走・僅がワシル・ワ

ヅカ 散クはハラクに ヒがキに 用キと用ヒ 率キと率ヒ 二音の近似性】

⑩逆にワ行からハ行音へ「同列に遷るのを傍遷、また異列に遷るのを準傍遷と名づけると例が殆ど無い ハ行  
がヤ行になつた準傍遷には、樞がカヤとなつたのがある。」

⑪ファフィフウフェフォは古来ハヒフヘホよりも少しく唇が狭められて発しられた音

【北方の人の発音 出雲や九州の一部にfの音 或は朝鮮の系統 アイヌなどにも いくらか本島人よりは  
多くあるやうである 越後・出雲伝説の類にも彼此連絡してゐる形跡 更に当時の日本より北に当る国とか、  
北西に寄つた朝鮮からの影響が無かつたといふことは寧ろ想像しにくい 今大きい線を本論の上に投げて居  
らぬから差置くのである。外国語のvの音も 今の所では多く論ずるに足らぬ。日本化する場合にはワキウ  
エヲになる。】

⑫ヒヤヒイヒユヒエヒヨ v系の音のやうには少くない。

【拍子 平仄 兵量 百姓 字音の外、覓をヒヨウといひ雹の字をヒヨウと ホヤ・ホヨもヒヨウのやうに  
発音する人 ヒヨンの木といふ例 喜遊笑覧<sup>(80)</sup> 此木をヒヨンと呼もこの故なりヒヨンは瓢なり、とある ヒヨ  
ウヒヨウ栗 ヒユウヒユウ風・ヒユウドロの類も擬似音 続山井<sup>(81)</sup> 芭蕉の若い時の句 夕白にみとるゝや身  
もうかりひよんのウカリヒヨン ヒヨんな事 ヒヨイト見る 俗語俚言 ヒヨットコ ヒヨウロク玉 実在  
の人名 太閤時代 ヒヨットコ斎 香木にヒヨンとかヒヨンカツ ヒヨンは伽羅の皮で 飄 飄勝 ヒヨツ



トコ 不男フナトコの変化の語 或は火男ヒナトコの変化 間投詞にはヒャー ヒュー】  
 以上七種のうち前四種、ア行ワ行ヤ行ハ行が我等にとつて普通かつ重要であり、後の三種ファ行ヅ行ヒャ行はさほど問題にならない。さて、これらがア行の喉音から段々と口頭の干涉を受ける音に移つて行く順序で、唇音に親しくなつてゆく、と露伴は展開する。

(二) 唇音・喉音・舌音・半舌音

唇音という一流れは爆発性の一群であり、もっとも軟かい方ではマ行、硬い方ではバ行。マ行の音にはムやウの音が準備の音として出やすい、という。たとえば、埋木・埋井 ウモレはムモレとも 茨はウバラともムバラとも又イバラとも 万葉集の東歌には字萬良 宜もウベ・ムベ両用 神武紀に諾の字をウメナリと訓である。マ行は婉柔、バ行は麤剛。強くなつて行く場合にはマ行がバ行になつて行くし、弱くなつて行く場合にはバ行がマ行になつて行くと見て、マ音の説を以下に展開する。

① マー 驚嘆の度が少く バー その度は多い

【真といふ意味のマコトがマの正体でマゴコロ 真白・真黒・真青・真赤・真緒 真澄・真盛・真暗・真夜 中・真昼・真冬・真夏・真金・真帆・真顔・真止・真直・真中・真先・真上・真下・真面・真向等いくらか 変転して、美しさを称する意味がそれに加はつて来る 真木・真柴・真菰・真砂・真弓・真楫・真砥・真魚 や国の真保良がその例 正シ・全シ・円シ 圭角が無くて穏やか 円 忠実 玉 妙 魂 勾玉 馬 従順な 動物だからであらう 今 イ坐ス・イ向フ 甘シ・甘シ ウは準備の音 マに甘の意味 祭 は少しく臆説 であるが、神の心を人間の私を加へないで承けること 学ブはマネブ 似せて行くことをネブ 源氏物語に

もネビマサル 招クは覓グといふ詞と関するか 祈グ〔記神代〕八島国妻麻岐かねて遠々し 恐らくは曲グ  
 につながり、曲グは負クにもつながらう 卷ク 任ク 蒔ク 舞フ 間 もとは中心の意味から出来つたに  
 違いひない。間切ル・間引ク 紛ル 間ニ合ハス 間ニ合ハセと俗に 第二の転義 曲 円居 目もマ 前  
 は目の方の義 的 も目処であらう 魔や摩訶のマは外来語であるから論外とする 猿をマシラ 古今和歌  
 集卷第十九1067、誹諧歌、凡河内躬恒 侘しらに猿な鳴きそあしびきの山のかひある今日にやは有らぬ 真猿  
 の転でマは即ち真だとする説 梵語と解するは甚だ浅薄 禍津日・枉言のマガ 蠱のマ 貧窮・貧シのマ  
 考へ所が無いではないが、別に論じた方がよいかも知れぬ】

## ②ミ音以下の説

【韻のイが縦衝する性質の音、中が張る意 身や実 水 海 天をアマ・アメ マ行音が本源 満ツ 美・  
 御の字を填てる美称や尊敬のミは真の義のマと源は同じであらう 右は古言ミギリ ミギリはマガリである  
 といふ解釈は如何か ミの音に既に力の籠つた意味】

## ③ム音

【胸 屋の棟 田の畝 ナ行音に準備音が出て来る例 万葉集卷十六 3853、大伴家持の瘦せたる人を啜り咲ふ  
 歌石麻呂に吾物申す夏瘦せに良しといふものぞ武奈伎漁り召せ 和名抄に、鱸、无奈岐、胸黄であらうとい  
 ふ解 腹赤といふ魚名 ムやウは準備的の音であるとも解せられる 群ル・結ブは散らばつてゐるものを纏  
 める意味 向ク・向フ 向伏スなどの如く統べる意味】

## ④メの音もその通り

【目や芽 目は見グのマ 見ルのミ 守ルのモとも通じてゐる】

⑤ その音の例

【物・本・下・許・森・茂・盛・漏・脆・持・萌・燃 中心から発したやうな意味 面のモや母屋のモ】

⑥ マ行の内遷の例は外にもある

【捲ルがメクル 外来語のマルモットMarmotがモルモット 鷗は古くカマメとも 隅がスマと訛つたのも

ミではミミズがメメズ、蟹のカザミがカザメ 檀子はシドメ 藪はシトメとも訛るが如くで、ムがモにな

るのには潜ルがモグル、ムグラモチはウグラモチともモグラモチとも 鳥の臓のムムキはモモキともモモケ

とも 蓬はヨムギともヨモギとも 神風・神懸・神館・神税・神嘗・神事等の神がカムとも カム又はカン

とも m系の音 n系の音 近似音 韭はミラでもニラでも 鳩はミホでもありニホでもあり、蝻はミナで

もありニナでもあり、船首はミヨシでもありニヨシでもある 木乃伊をニイラとも 零余子はムカゴでもあ

りヌカゴでもあり、垂乳女はタラチメでもありタラチネでもある 日本書紀神功皇后の条に、爰に新羅王波

沙寝錦即ち微叱己知波珍干岐を以て質と為て云々 新羅の王号尼師今のこと m n 遷移の例】

⑦ マ行に隣る音としてはミヤミュミエミヨ 印度から仏教が渡来すると共に入り来つたもの 多く論ぜずとも

のことである

【新古今和歌集第二十积教歌 1920 伝教大師 阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ杣に冥加あらせたまへ

人名にも三藐院など 冥加 妙見 明神】

⑧ バビブベボの五音は唇音の中でも麤剛で、「日本人は麤剛なる事を余り好まざる国民であるからバ行音を頭

に用ひた語も少く」と戦時下に露伴はいう。大抵は外来の語や事物に因んだものであるのをもって見ても分る——

【馬鹿 秦の趙高の故事 どうも当てにはしかねる説 梵語の慕何または摩訶羅の転であるとか 新村氏のワカ説<sup>82</sup>、柳田氏のヲコ説 ヲコはヲカシとも関係する語らしく 応神記に、わが心いやをこにして、といふ御歌 vに近い音だとも見られはない 場 問の広くなつたのを指す気味 姥のバもマが本であつたやうに思はれる 化ケ 日本書紀 宇治拾遺<sup>83</sup> 皇極紀に見える術とか奇術とか 平安朝の書写本にマケ・ミマケと訓んである びんづら結うたる童 ビンヅラはミヅラの転 打ツはウツの往遷 紅は倭名抄に閉邇<sup>84</sup>】

⑨ マ・バがウ列の音に合するとモ・ボに転ずるのを常とする

【申スは古くはマヲス マウスになり モオスと発音 設・儲のマウケも 発音はモオケ 字音で毛・孟・猛・亡・盲・妄・網等のマウがモオと発音 バの字音では坊・帽・望・暴・妨・亡・忘・芒・茅・傍等のバウがボオ マ行音とバ行音との傍遷もしくは準傍遷は字音には殊に多い例であつて 馬(通音マ)・美・未・武・無・茂等が バ・ビ・ブ・ボウとも 米・枚・幕・末・萬・苗・物・没・木・目・文・聞等が ベイ・バイ・バク・バツ・バン・ベウ・ブツ・ボツ・ボク・ブン・ブンともなるが如くである。 邦語の例 昂<sup>スバル</sup>は丹後風土記逸文<sup>84</sup>にも 古くスマルト 狭はセマシ・セバシ、暫はシマシ・シバシ、隠はナマリ・ナバリ、茨はウマラ・ウバラ、蒲はカマ・カバ、櫛はシキミ・シキビ、夷はエミシ・エビス、神奈備はカムナミ・カムナビ、浴はアミ・アビ、歩はアユミ・アユビ、憫はアハレミ・アハレビ、悲はカナシミ・カナシビ、寂はサミシ・サビシ、寒はサムシ・サブシ、烟はケムリ・ケブリ、眠はネムリ・ネブリ、合歡木はネム・ネブ、虻はアム・アブ、禿はカムロ・カブロ、冠はカムリ・カブリ、傾はカタムキ・カタブキ、戯はタハム

レ・タハブレ、侍はサムラヒ・サブラヒ、弔トムラヒ・トブラヒ、眩はクルメキ・クルベキ、調はシラメ・シラベ 皇はスメラギ・スベラギ、点・乏はトモシ・トボシ、紐はヒモ・ヒボ、汗疣はアセモ・アセボ、神籬はヒモロギ・ヒボロギ 東京の訛りのアカンベは赤目 徒然草百八十一段 降れ降れこ雪、たんばのこ雪、古い童謡は、溜れこ雪といふべきを誤りてたんばのとはいふなり、と兼好 木瓜は古くはモケ 馬酔木は古言アシビで、アセミともアゼミともアセボとも 輝は古名ヒミ 面皰は古くは二禁とも書しニキミといつた 蛇は古名ヘミ 倭名抄に俗或呼蛇為反鼻一其音片尾 昔からミ・ビ両用 黴といふ語は神・上・守・頭等に通ずる語でカミ(85)なのである。 酒は黴だゝせる 醸スといふ詞 嚼ムといふ語が本 古事記の武内宿禰の酒楽の歌に、この御酒を醸みけむ人はその鼓臼に立てゝ歌ひつゝ醸みけむかも、舞ひつゝ醸けむかも麴カウヂは黴カムダチ 米も嚼ムから】

⑩バ行とハ行とも声変しやすく、一は唇音で一は喉音だがハ行の音が聯声もしくは累音の時に際してバ行音と変ずることが多い。聯音の法則を説明する時には音の促出と名ける

【芽バムとか気色バム ハムが変じたもの ハがバとなる例も少くない 喉音に近いハ行、唇音のバ行・パ行の間には音に軽重の差 童がワラベとも ワツパとも岨はソバと言慣はしてゐる 脛幅は脛穿の義 柩は戸臍トホツの義 ヤハリをヤツパリとも 木葉をコツパとも 一匹はイツピキで二匹はニヒキで三匹はサンビキ 八行・マ行の傍遷準傍遷 斑がマダラ 私ヒソカがミソカ 女郎花ヲミナヘシがヲミナメシ 蝙蝠カハホリガコーモリ マ行がハ行に遷るのである ワ行がハ行に遷る例は余り聞かないと前に言つたが 髭のタボ又はタブがタヲともいひ、もとタヲの転かとも】

⑪外唇音にはビャビェビュビョやピャピュピェピョ。「強て論ずることを須るない。」

【古来の我が音韻というわけではないから 助動詞のベクの音便ベウなどをビョーと発音する 一百・二百・三百はイッピャク・ニヒャク・サンビャク 百の字を三通りに発音】

口述は喉音・唇音から舌音・半舌音にうつる。タ行タ行ナ行とラ行とである。舌音は顎舌の音であり、今は歯音といっているが、昔の歯音とはサ行ザ行のことであつて、「用ゐる人により時代によつて語も義も一定してゐない」と説き、タラ・ダラ系の説が始まる。

⑫タラ・ダラ

【天武紀、元年六月の条 伊賀の荊萩野のタラ 地名 タラ タラの樹のタラであるか倭名抄などに載する古のタラと同じものであるかどうか 植物のタラ アイヌ語や朝鮮語にも照らし合わせるべきだが今は論じないで 地名のタラ その地の自然生植物によつて名を生じた場合もあらうけれども、一方に例へば野は延ブ 原はハルケシ・ヒロシなどの語に 阪は嶮<sup>サカ</sup>シに 平はタヒラといふ語につながるやうに、タラは垂ルといふ語に 或は地名から 垂ル 今人には滴下・垂直下のこと 本来の意義はかけの垂尾<sup>タリヲ</sup>・稲の垂穂<sup>タリホ</sup>・家の垂木<sup>タルキ</sup>・軒の垂氷<sup>タルヒ</sup>・石はしる垂水<sup>タルミ</sup> の語に徴して知るべきで 傾斜をなして下るのがタルなのである 今の工人の語に テリ タルとつながるタルム タワム 峠をタヨリ 傾斜の緩いのをタル・タルイ ダル・ダルーイ 同語異声 体がダルーイ 気分がダレルとかダラケル 荏苒延引の状をダラダラ ダラダラ阪 向ひ小だらの牛の子の、歌 ダラが既に傾斜を指す語 今の舟人の詞に、 洲ダレ又は洲のタレ 略してたゞタレともダレとも 「かけあがり」のなるいのが即ちタレ ダラリの帯 トロリ・トロトロといふ融状を示す語

トロク・トロシ・トロム・トロロク・トロカス・トロケル 溶融の義 蓋し盪トクは解トクの語に口の挿入されて出来たものではないであらう トロロ汁 トロトロ火 滯ト 紀州の滯八丁 伊豆の長津呂 真鶴何鶴のツル ダラ タレ 滾タギチ 迫門セト 淀ヨド タラス・タラカス・タラサス テレル・テレクサイ デレ助 デレリ・デレデレ ダラダラ ツルシ ズルシではなくダルにつながつてゐよう ツルケル ヅラカル ドロ坊は取る坊にあらず、ドラ息子 ドラの展開であらう】

タ行ダ行にナ行を加えて説はつづく。「悉曇(86)学者の方ではナ行音を舌末により、タ行音を舌本によつて生ずると見てゐる位で」、軽音重音・鋭音鈍音や本音末音と呼んでもよい。

⑬ ナ行

【乃・内・奈・那・男・女・奴はナイ・ナイ・ナイ(通音ナ)・ナ・ナン・ニヨ・ヌ 又ダイ・ダイ・ダイ・ダ・ダン・ジョ・ド 奈良 檜 那羅山や奈良阪 ヌラ ヌラリ ドロ ドロリ ドロドロ 百鬼夜行(87)巻 怪物をヌラリヒョン 沼はヌ 塗はヌル 漆髹はヌリ 髹師はヌシ又はヌツシ 濡ル ヌル・ヌルシ・ヌルム ヌル火はトロ火 漆科の白膠木はヌリデ又はヌルデ 秦皮トネリコは戸(88)ヌリ木 海苔・糊・血 ノリ ノロ・ノロリ・ノロノロノロマ ヌルマ 俗語のノロケ・ノロク・ノロケル ノラモノ ノラ打ツ・ドラ打ツ 遊惰漢転じて放蕩漢の義 退ノクはドクとも 方言で何々ナラを何々ダラ

⑭ タ行内遷

【タガミ手上・タゲル手繰・タチカラ手力・タツカユミ手束弓・タツナ手綱・タマクラ手枕・タムケ手向 タはテ 違タガフはチガフ 万葉集卷八1522秋雑歌、山上憶良 たぶてにも投げ越しつべき天漢隔てればかもあまた術スベ無き タブテは礫ツツテ 溜タマルルが止トマルと通ずる語 源平盛

衰記の那須与一 扇代にもたまらねば タがチ・ツ・テ・トと韻遷 タの下にウ・フが来るとトー 峠トウゲや  
 貴タクトの例 字音では唐・当・棠・党・稻・湯・宕・逃・盜・到・刀・陶 タウ 答・塔はタフ トーと発音  
 徒然草二十二段 古は車もたげよ火かゝげよ モテアゲヨ それより以前にはモタゲヨ モチアゲヨとも  
 タチアカシ 立明 栄華物語 紫式部日記にはタキアカシ 倭名抄は太天阿加之タテアカシ 館クダチがタテ 帯刀オビハキがタテワ  
 キ 立涌タチウキがタテワキ 父チチが 父御テテゴ 血のちも乳のちも 恐くは唾ツバキのツも ちは血も乳も霊も風も土も鈎もチ  
 切・節のセツはセチとも 茅花ツバナは茅チの花の転 梅トガはツガとも 手著をタツキ・タドキ 角をツヌ・ツノ  
 併用 手を活せて取トル 目守マモルの原形がモル モルは目の活用 詞・声の訛タムや彩タム ダムとなり 誰タレがダ  
 レに 鬢アタがアダに 地チはヂとも トヨムはドヨムとも】

⑬ ナ行の内遷の例をもう少し

【万葉集で虹を詠んだ東歌 卷十四344 弩ヌ自ジ 楡ニレの木は滑ヌレから 主ヌシはニシともノシとも 似ニルは古くはノル  
 拭スグフはノグフとも シヌノメがシノノメ 偲シヌブがシノブ 逆サカに貫クワンノ木はクワンヌキ 拱コマクがコナネクに  
 寐ヌルはネルと訛シつた 魚・菜・下物 ナ 魚子イサコは魚の子 手テ中ナカ・手裏テウラ・手テ心ココロ・手テ底ソコ・手テ末スエ 水ミ上カミ・水ミ際ハ・  
 水ミ口クチ・水ミ底ソコ・水ミ門カド・水ミ源ノト 償ツグナヒはツグノヒとも 金のネは金具カナグ・鉄屑カナクツ・鉄敷カナシキ・金盃カナダラヒ・金棒カナボウ・金椀カナマリ・金山カナヤマ ナ  
 となり 稻イネのネも稻城イナキ・稻瀬川イナセガハ・稻妻イナヅマ・稲葉イナバ・稲光イナビカリ・稲村イナヅマ ナとなり 船フネのネも船脚フナアシ・船軍フナイクサ・船歌フナウタ・船子フナコ・  
 船橋フナバシ・船端フナバタ 胸ムネのネも 胸板ムナイタ・胸苦ムナグルシ・胸騒ムナサハギ・胸先ムナサキ・胸算用ムナザンヨウ 棟木ムネキもムナギ サネ 葛サネカヅラは古く古事記や万葉に  
 はサナ葛 伊勢物語十四段 夜もあけばきつにはめなてくだかけのまだきになきてせなをやりつる キツニ  
 を谷川士清は狐とし 伊勢物語 花鳥物語 万葉集 キツ ケツネ 倭訓栞の狐の項に 扇の要は蟹の目で



カニメ 呼びかけの声のナウ ノー 字音の 脳・囊や納】

口述はラ行にうつる。先に半舌音といったラ行は、タ行ダ行ナ行にくらべて卷舌のやうな声になる、という。邦語のラ行音は l と r との中間の音。「古来の我が国の訓にはラリルレロを以つて始る語は見当らない。」として助動詞と助辞から始める。

⑩ ラム・ラメ・ラシ・レ・リ・ル・ルル

【助詞に東国方言の動詞に添はつて命令をあらはすロ、古今集のベラナリのやうな語法のベラや方言の接尾語のヅラのラ、処女等・児等 名詞・代名詞に添はつて複数をあらはすラ、尾呂・家呂・妹呂・青根呂・伊香保呂 単に名詞に添はるロ 数詞にツが添はつて一ツ・二ツとなると同じくりを添へて一人・二人 人数を示す場合 ドンミリ、トツプリ・カラリ・ガラリ・カタリ・ドサリ・バサリ・ハタリ・バタリ・ハラリ 擬音的の語にリを 代名詞に限つてレを 吾・吾・彼・是・其・己・汝・誰 【記雄略】 吾はまがごとも 一言よごとも一言【万3749】 あが恋ひをらむ時のしらなく、【万3145】 わぎも子があをしぬぶらし 【万3746】 国わかれしてあれはいかにせむ、【万3747】 我宿の松の葉見つゝあれまたむ ア ワ ワレも吾 【万3886】 なにせむにわを召すらめや、わが家・わが庵・わが身・わが心・【記神武】 わがさける利目 【万193】 われはみながら都とぞする、われおとらめや独寝る夜は、われと・われが・われながら・われにもあらず アとアレ ワとワレ 彼をもア アレ 何事にもまづあの御方のことを、あのつらき人のあながちに あれがやうにいつの折とこそふとおぼゆれ、あれは何物ぞと問ひければ カが彼 【万4384】 あかときのかはたれ時、かの方にはやこぎよせよ時鳥 かれが身に只今ならばや、かれは何ものぞ コが此 【記神代】 ことの語りごともこそ

ば コもコレも此 ソもソレも其 オノもオノレ ナもナレも汝 たそ・たが タも誰 タレも誰 ア・ワ・カ・コ・ソ・ナ・タ アレ・ワレ・カレ・コレ・ソレ・ナレ・タレ】  
 これらは「レが添はつたとして見る方が自然のやうに思はれる。」といい、「レは一体何の意義を有するのであらう。」と首をひねっている。

①⑦【前出の尾呂・家呂・妹呂 侘しらに・さかしらにのラ 「万<sup>3865</sup>」めこのなりをば思はずの口 但しレは代名詞の大部分に通存し、今でも俚語のオレ・ワレ 一種の辞法とも】

露伴はラ行音、ことにレ音についてはよほど思案したようである。<sup>(89)</sup>「上代の我が国と交渉があつた外国にも、かうした辞法語形が存するものか無いか一応考へたい。この事についての疑ひは嘗て一度発表したことがあつたが」という。自分の間に答えた人のいたということも未だに聞けずにいる――。

①⑧ 仮名遣ラウがローと発音する例

【郎・老・勞・牢等 ラフと書してロー 蟬・臆 白は白魚・白樫・白紙・白木・白雲・白洲・白玉・白波・白拍子】  
シラマニ シラビヤウシ

①⑨ 語に冠する時は概ねロがラに変ずる<sup>(90)</sup>

【恰も稲・金・船・胸がイナ・カナ・フナ・ムナ 酒・竹がサカ・タカ 天・雨がアマ 爪がツマ 上がウハ 声がコハ のと同じわけである。】

②⑩ ラ・レの相通

【群がムラ・ムレであるやうに 伊勢物語八十七段、そのよ南の風ふきてなごりの波いとたかし ナゴリ

散木集811?・817?に、其夜南の風吹きてなごろいと高し ナゴロ 字音の六・陸等】

②1 リク・ロクの両音

【駕籠舁をいふ六尺は力者の転 拾フヒトの古語はヒリフ 歩クアルはアリク 江戸語では悪イフルをワリイ】

②2 レ・ラの両音

【オレ 地方によつてオラ 蔓・弦のツルは古くはツラ 古今著聞集(91)卷第十六興言利口 引出物の程らひな  
どさだめて 程ラヒは程アヒ ヒケリミキリ 左右のミギリがミギに 思はれなくもない 鄙称方言 甲斐の波木井 土地  
の者はハキリ 九州の一地方で噁オケヒをオコボリ或はオコモリ 退クシツクをシゾク 蛞蝓ナメクジは猿蓑の凡兆の句1750、五月  
雨に家ふり捨てなめくぢり ナメクジリともナメクジラとも 荻生徂徠の政談(92) 卷一、右の如き少人数にて  
は江戸中引張りたらぬ也、の引張りタラヌ 物をあてがふのに人数多くて行渡らぬ義 仙台ではヒツパイタ  
ラヌ】

②3 リをイに

【ゴザリマス 今普通にゴザイマス 古語の漁イサリを九州地方及び南方の島ではイサイ 夜松明をつけてする漁  
撈の義】

②4 ナ行ラ行の遷移

【天草辺で漁家に設けられる竹製の乾し棚をナダナ 魚棚の義 ナダラとも 沖合のことをダイナンともダ  
イランとも 古文書に焼名の字をあてゝゐるタイナ 夜焚きの網船に乗込む大工の称 隠岐でタイナ舟 出  
雲でタイラ舟 古事記に角鹿ツヌカ 敦賀ツルガ 武蔵の東部の方言 隠カクレルをカクネル】

㉕ ダ行ラ行の遷移

【渚<sup>ナギサ</sup>に当る語をナイダともナイラとも 九州辺ではダ行がラ行に通ずる 下<sup>クダ</sup>サイをクラッセエ 玉<sup>タマ</sup>かつま<sup>93</sup>八之巻 縮緬は今の世にも云ふチリメンなるべし、但し昔はチギメンと云ひけむをチリメンとは訛れるなるべし 堪・耐の字にはコタフ・コラフ両様の訓 煽<sup>アブ</sup>りを食ふを煽<sup>アブ</sup>チを食ふ 酒を 煽<sup>アブ</sup>リキリを煽<sup>アブ</sup>ツキリ 摺<sup>ツカマ</sup>フをツラマフ カ行ラ行の遷つたの 信濃の一茶の方言雑集<sup>94</sup>に、オッパリ、引請けて働く事、江戸ヨッパシなどに同 バカリ・ヤツパリが江戸ではバカシ・ヤツパシ 乱<sup>ラッパ</sup>波<sup>バ</sup>將軍 太閤<sup>95</sup>記・甲陽軍鑑<sup>96</sup>の諸書に散見するスツパと同源かとも 支那語から出てゐるかも 黒子 伊呂波字類抄<sup>97</sup>にもハハクソ・ハハクロの二解】

露伴の口述は改行しないまま「サ行ののソとラ行のロと相通じたのである」というところから、ラ行サ行・ラ行ザ行の遷移の問題に及ぶ。

㉖ ラ行ザ行の遷移

【蘭語のルーフル<sup>Roof</sup>がズーフル ラが音便でンとなる例 あんなる・ゐたんめり・べかんめり・あんべいかな・近かんなり 竹取・伊勢・源氏・枕草子などに 榛<sup>ハリ</sup>ノ木がハンノキ 盛<sup>サカ</sup>りがサカン 去リヌルがサ<sup>ン</sup>ヌル ナリナントスがナンナントス 扱<sup>ヨリドコロ</sup>所がヨンドコロ 俗語でも足りナイがタンナイ ソレナラがソ<sup>ン</sup>ナラ スルナがスンナ 痛カルベシが痛カンベイ 反対にンがラ行に 讚<sup>サハラ</sup>良<sup>ラ</sup>・播<sup>ハリ</sup>磨<sup>マ</sup>・平<sup>ヘ</sup>群<sup>グ</sup>・群<sup>ク</sup>馬<sup>ル</sup>・駿<sup>スル</sup>河<sup>ガ</sup> サ<sup>ン</sup>・ハン・クン・スン<sup>98</sup>の音をサラ・ハリ・クリ・クル・スル】

㉗ 舌音に於ける拗音

【チャチュエチヨ・ヂャヂュヂエヂヨ・ニヤニユニエニヨ・リヤリユリエリヨ ヤ行を用ゐた標音法の古

記録 平安朝 敵の音チャクをチアク 楮の音チヨをチオと書した古例など 夕行がチャ行になり易い 皺  
 クタが皺クチャ ゴツタがゴツチャ】  
 おそらくは信州坂城の不自由な灯火管制の合間をぬってのことであろう、「音の各論」の口述と筆記はなおつ  
 づき、摩擦的なサ行ザ行や、牙音のカ行ガ行に及んでゆく。

(二) 半舌半顎の音

サ行・ザ行は摩擦的の音であって、古い音韻学の七音(99)に分けた分け方では齒音としているが、むしろ口蓋に近  
 くて発せられる音であるという。「舌端のやや後部と上顎との間隙から内気を押し出す時に生ずる」から、夕行  
 ザ行ナ行ラ行と同じく顎舌の音であり、半顎半舌の音と称しえられるという。

サ行と夕行、殊にシとチとの互換(100)の例は、あるいは古くシがチ、チがシであったかを思わせる。あるいはシで  
 もなくチでもない古音が存在していて、それが後にシとチに分かれたものとも考えられなくはない。風に  
 「シとチ」を聴き分けた露伴独特の耳である。

① シとチ

【風 古くはシとも 紫蘇シソを東京ではチソ 縮の字はシジムともチヂムとも 蹙シヅの字シジマルともチヂマル  
 とも又シジカムともチヂカムとも 蜆貝も縮み貝の義であらう 義経記の奥州本(101)に、今思はずも一つ所でう  
 つちぬは嬉しんだぞ弟よ、のウッチヌは後にオッチヌ 死ぬの変化の語 臍次シラシモ無イがラッチモナイ アタシ  
 をアタチ 江戸の詞でワタシをワッチ又はアッチ 皂角子サイカシをサイカチ 擬音的の語 ミッシリとミッチリ

キッシリとキッチリ ギッシリとギッチリ ガッシリとガッチリ シ・チ両存 万葉東歌3474何方向きてか妹が嘆かむ、の何方を伊豆思<sup>イッヂ</sup> 4378母父が玉の姿は、の父を志志<sup>チ</sup> 4392天地のいづれの神、4426天地の神に幣置き、の天地を阿米都之<sup>アメツチ</sup> 4413枕刀腰に取り佩き、の枕刀を麻久良多之<sup>マクラタチ</sup> 4417多摩の横山歩ゆか遣らむの歩を加之<sup>カチ</sup>】  
 これらは東国でチをシと発音したというより、「発音し聴取し復元する場合のチ・シの音の判別が明瞭でなかつたのだとも取られる。」と露伴は見る。その証としてもよいのは、『常陸国風土記』にのせる常陸の国号の由来である、という。すなわち、

②【チカシ若くはヒタシの義 同書那珂郡の条、大櫛の岡 大きに朽ちし義 即ちオホクチ 景教碑 貞観十二年勅建の唐の大秦寺<sup>ダイシン</sup> 後漢書<sup>102</sup>に、大秦国一名犁鞬 とある犁鞬又は犁耜 ダイはダ行ラ行の音転でラ シンはチン 即ちダイシンはラチン 民族名が国名と混同 外国の例 条支は今のアラビヤ 唐書に謂はゆる大食 其人種を大希 条支は テウシ 大食はタシツ 大希はタチ】

「即ちチ・シの極めて近声であることを示してゐる。」とあって、いわゆる四つ仮名の問題を思わせ、段落改まって「ジとヂ、ズとヅは日本全国で或地方以外には発音する上に於いて全く遺分けられなくなつてしまつてゐる。」と展開する。

③ジとヂ、ズとヅ

【鯨の仮名遣 ドゼウ ドジャウだともドヂャウだとも 塵添堪囊抄<sup>103</sup>に土長の字 狩谷掖斎 泥鱈の字音の譌でドヂャウ 天野信景の塩尻にも登知也字<sup>ドヂャウ</sup>也 寺島良安の和漢三才図絵<sup>104</sup>には、俗に止之也字 泥鯨字音の譌としてドジャウだと 小山田与清の松屋筆記<sup>105</sup>の説では、泥津魚の義でドヅヲかドヂヲ 蛸蜒<sup>ゲシゲシ</sup>のジをヂ 梶

原景時 下知々々と唱へて威を振つたからゲヂゲヂと異名 音でゲジゲジ 一場の諧謔 辻もツジかツヂかは路または地 ツヂだと 宇津保物語の俊蔭の巻、つぢに立ちたまへり、のツヂは一本にツジ 同じ巻の、文の道は少したぢろぐとも、のタヂログもタジログに作つたのが 源氏物語・浜松中納言物語などにも 或は立退クタチシロクの略転でチ 或は身動グミシロ目動グマシロのジログのジだと 地味も填字でジミかヂミか不定 狡猾の義のツルシはズルシではなからうと前に 「豆腐の「から」をキラズ 殻屑カラクツの略転でキラヅだといふ説も 弾むハはハジクに通ずる語とも 極ルハツム ハヅム 蹲踞ハツムの義のウヅクマルはウズクマルであるとも】

サ行・ザ行の途中で露伴は、「かういふ仮名遣の問題は」といって足踏みをする。

イとキ、エとエ、オとヲ イ・キに対するヒ・エ、エに対するホ・フ、ハとワ、フとウとユつまり「中世に起つた仮名遣といふことが整理よりも寧ろ煩雜にして無意味に近い法則を成立たせるに至つた。例へば」と以下に例をあげ、「もともと不確かなもの、まぎれやすい例といふのも少からずある」と結ぶ。音幻論からする露伴〈仮名遣〉論であろう。

④無意味に近い仮名遣い法則

【花を手折るの折ルはヲル 花を折るの折ルはオル たゞ親といふ時はヲヤ、親子 オヤ 御山ミヤマ風 オロシ 重シはヲモシ 露を重みの重ミはオモミとする類 徳川期 俳諧師支考 男はオトコ女はヲンナ 桶はオケ小桶はオヲケ 尾はオ緒はヲ 雛はヒナナが正しけれども次手書する時はヒヒナにてもよろしく、於はおキテなれどオイテの方やすからん、盥はタラキ手洗はテアラヒ 机はツクエで此時は枝ノエの字といふ故実

なりとぞ 無批判な祖述 例のえせ故実】

⑤今日の歴史的仮名遣なるもの

【実際には尚若干の例外的事実 日本書紀神代上、先づ淡路洲を以て胞と為す、とある胞はエで後にナが附いてエナ 林道春の多識篇<sup>⑩</sup>に、人胞、比登之恵那、胞衣水、恵那美豆 エナにしてゐる 推古紀三十六年春三月丁未朔戊申、日蝕<sup>ハ</sup>尽きたること有り、の蝕字は古訓ハエ 天武紀九年冬十一月壬申朔、日蝕<sup>ハ</sup>ゑたり、ハエ 歳徳神を祭る恵方はエハウ 吉方とすれば住吉・日吉の吉でエハウ 烏帽子はエボシかエボシか、襟はエリかエリか、舛はエリかエリか 天治本新撰字鏡卷七、木部 楛、奈波江也 ナバエは夫木和歌抄卷三、春、柳歌、源仲正の、とびのゐるるぐひの柳なばえしてめぐみにけりな春を忘れず<sup>⑩</sup> 石川雅望の雅言集覧にはナバエ 柳のすぐに延たるをいふなり、長延か 中島広足の増雅言集覧にはナバエ 楚はスハエかスハへカスワエか 萩はズイキかズキキか 宿直はトノイかトノキか 賀茂真淵は万葉考<sup>⑩</sup>でトノイ 猿蓑の芭蕉の附句<sup>2002</sup> まいら戸に蔦這ひかゝる宵の月、のマイラ戸は参らう戸の義 疑はしく、マイラかマキラかマヒラか不明 犯スはオカスカヨカスカ 動クはオゴクかヨゴクか 怠ルはオコタルかヨコタルか 驕ルはオゴルカヨゴルか 羽織はハオリかハフリか 到頭はタウトウかトウトウか

口述はサ行ザ行のことにもどる。

⑥サ行とタ行との傍遷

【塞グはフタグとも 卯の花くたしのクタスは腐ス<sup>クサ</sup> 寝腐れ髪<sup>ネククケ</sup>のクタルともクサルとも載ル・掲ス、足ル・足ス、現ル<sup>アラハ</sup>・現ス、下ル・下ス、残ル・残ス、乱ル・乱ス 源俊頼の散木弃歌集卷三三九、秋、朝夕に撫でつゝ



生ふす刈萱をしがへて君がみまくさにしつ、のシガフは顕昭の注　ツガフ　窄ムスホはツボムに通ずる　瓢箪のおほひの網、法螺の網、数珠の総の網のごときところ　茶人の袋の緒カガリの緒の類をスカリ　ツガリといふ語に本づくやうだ　sとchとの音遷が茶の字音がサでもあり拗音のチャでもあること　誰々サンが誰々チャン　小児の語でドッサリがドッチャリ、トウサマがトウチャマ　オッ死ヌ　臍次モ無イ　老子の字アザナ聃は耽に通用し、耽は儋に通用　聃・儋ともにタンとセン又はゼン】

「支那音ではタン・センの一字両音あるは普通のことである。」ついでに言うと、漢語が日本化する時ザ行がナ行になり易い、という。

⑦ ナ行の例

【肉はジクだがニクと　柔ジュウがニウ、日ジツがニチ、人ジンがニン、任ジンがニン、饒ゼウ・繞ゼウがネウ、然ゼンがネン　梅仁・杏仁がバイニン・キョウニン　拗音では如ジョ・若ジャクがニョ・ニヤク　ザ行ダ行の遷移　東京語で等をナドナゾ　方言で何　ダゾを何々ダド　榮螺は山家集、下1376、さだえ棲む瀬戸の岩つぼ求め出で、急ぎし海人の気色なるかな、のサダエで又サザエともサザイとも　今もサダイといふ処　カズノコを数子と書くのは填字　鯨カドの子の転階キザハシはキダハシとも　渾名はアダナとも　神代紀の上、物種はモノザネ・モノダネの両訓】

⑧ サ行とラ行とが遷る例

【ヤッパリ・バカリがヤッパシ・バカシ　反対にシがりとなるのでは拍子ヒヤウシがヒヤウリと訛る　鋭スルドシは古くはススドシ　ザ行ラ行の例　人力車ジンリキシャをリンリキシャ　東京の人はシをヒ　ヒをシ　朝日をアサシ、浸ヒタシ物をシ　タシモノ　シコの酢煎スイリ　シコは、ヒシコがシシコとなりシコ　菱餅をシシモチもしくはヒヒモチ　仕付糸

のシツケを隠し仕付といふ時には カクシビツケ 餌をエサともエバとも 牙<sup>キ</sup>をキバ】  
 「顎舌の音サ行と唇音のバ行とは特に親近の関係は無い。」

⑨サ行の内遷の例

【<sup>ツ</sup>剃ルをスル 彼<sup>アソコ</sup>処をアスコ 幽<sup>カソカ</sup>をカスカ 真<sup>マソホ</sup>緒をマスホ 倭名抄に波<sup>ハツ</sup>曾と訓じてゐる 鱗は今ハス 十<sup>マ</sup>寸  
 鏡<sup>カガミ</sup>がマソカガミ 漫<sup>ススロ</sup>はスゾロ又はソゾロとも 濯<sup>スス</sup>グをソソグと 雉はキギス・キギシ両存 咳はスハブキ・  
 シハブキ 燈<sup>トウシ</sup>心はトウスミとも東北地方 何々スルが何々シル 自動車<sup>自動車</sup>がズンドーシャ 出羽国の蘇武が沢  
 ソブは 今の語の<sup>シ</sup>渋 渋水の出る沢が渋沢 猿蓑の凡兆の附句<sup>2095</sup> あかそぶの水、は赤渋 万葉集卷一、  
 雄略天皇 掘<sup>フグシ</sup>串もよ、のフグシか今はホグセ 枷<sup>カシ</sup>をカセ 矢橋<sup>ヤハシ</sup>をヤバセ 幾<sup>イクトセ</sup>年のトセは年の相通 が 年<sup>トシ</sup>経  
 の約<sup>セ</sup>だとする説 背<sup>セガヒ</sup>は背向・背向<sup>ソムク</sup>の時にはソだ ウツセミはウツソミとも 神代紀上の天<sup>アマ</sup>の吉葛<sup>ヨサツラ</sup> ヨソヅラ  
 とも ササヤクともソソヤクとも ササクルともソソクルとも 削<sup>キサ</sup>グはキノグの義 躁進<sup>キシン</sup>の義のササクはソ  
 ソクとも又ススク・イススク ナサツタがナスツタ 下サツタが下スツタ 逆<sup>サカサマ</sup>・横<sup>ヨコサマ</sup>がサカシマ・ヨコシマ  
 字音の相・葬・壮・争・早・叟・曹・倉等 淋<sup>シ</sup>の音便のサウザウシや騒<sup>サウザウ</sup>々シや左<sup>サウ</sup>右<sup>ウ</sup>ナシや雙<sup>サウ</sup>ナシ 象・蔵・  
 造等 仮名遣ザウで発音ゾー 雑<sup>ザ</sup>ザフ発音ゾー 動詞<sup>サマ</sup>の候<sup>サマ</sup>フはソーロー 支<sup>サ</sup>フはサウ 外来語の泊夫藍はサ  
 フラン じが蜂のジガは似我の音とする説 古名スガルの転であり サ行ザ行の剛<sup>サマ</sup>転<sup>サマ</sup>韻<sup>サマ</sup>変 端<sup>サマ</sup>がハジ 様<sup>サマ</sup>が  
 ザマとも 騒<sup>ソウ</sup>クがゾメク 貝<sup>カ</sup>のカセを奥州・佐渡でカゼ 風<sup>カゼ</sup>は風穴・風車・風見・風向・風鳥帽子 カザと  
 なる 数<sup>カズ</sup>は活用して数<sup>カズ</sup>マフとも カゾフとも 火食鳥のカゾアル Casoar は外来語 カズワル】

と、ここで露伴は外来語「瑠璃<sup>ルリ</sup>」の音幻に口述の時をついやす。「一体外国の言語が他の国へ移し植ゑられる

時には多少の変化を免れないのが常で、例へば」という。

⑩【印度の詞が支那に入るとプラシニアprajña 般若 ベンニヤ ニルヴァーナNirvana涅槃 ネハン いろはガルタの、瑠璃

ヴァイドリアVaidurya 毗頭梨ビツリ又は吠瑠璃 吠は音ヴェ vがbになったりドリアがルリもしくはヅリ

として写された 後には吠も省かれてルリとなつた 瑠璃光 紺色が多く 天帝インドラの像の冠 橋薩羅國 曹

操が瑠璃の筆管の筆 今謂ふガラス 唐 義浄三蔵 字まで瑠璃 浄瑠璃 ビードロVidro 葡萄牙 紫宸

殿がシシイデン 淑景舎がシゲイサ 冷泉がレンゼン又はレイゼイ 漢語が我が国にはひつて入つて来たの

を捉へて云々するのは無益の穿鑿】

「一般にかゝる類について頑なに論ずるのは寧ろ避けたいことである。」と切り上げて、サ行・ザ行・ダ行の拗音にうつり、中世以後の字音から話が始まる。

⑪中世以降の字音

【笙・唱歌・障子・精進・菖蒲・釈迦・須彌山・棕櫚・修理・秘色・書写山をサウ・サウカ・サウジ・サウジン・サウブ・サカ・スミセン・スロ・スリ・ヒソク・ソサザン 時代を降ると逆に尺サカがシャク 鮭サケ・左官サクワン・三味線サミゼン・蒿苳チサ・嚏クサミ・吃逆サクリ・髑髏サレカウベ・鯢銚サチホコ・杓ヒサク・細螺キサゴがシャケ・シャクワン・シャミセン・ツシャ・クシャミ・シャクリ・シャレカウベ・シャチホコ・ヒシャク・キシヤゴ 曝サレルがシャレル、拯スクフがシャクフ、スハブル・シハブルがシャブル、ソボソボがショボショボ サシスソがシャ・シュ・シヨにサ変ずる傾き 戯ザレルがジャレル 修法をズハフ、従者をズサ ザ行の拗音を忌むんだ古い方の例 笏の音はコツ 尺の音を借りたのであるとも 字彙に音 永、佐久木 可レ為レ笏と注する椽 倭名抄に佐久木、可レ為レ笏 笏は椽すなはち

サクの木で作るからサク 音通してシャク 短冊はタンザク・タンジャクとも、数珠はズズ・ジュズとも、書籍はシヨセキ・シヨジャクとも 字音でも沙はサでありシャであり、石・柘はセキでもシャク・ジャクでもあるが 和漢に跨つた場合は一概に 端折ル ハシヨル 皺喰ルがシャガレル 仰有ルがオツシヤル 洒落 シヤレル 喋ルとか蹲ムとか シヤラ臭イとかシャツ面とか ショッパイとか シヤ行の例】

以上に述べた半舌半顎のサ行ザ行のあと、牙音であるカ行ガ行との間に音の関聯が見受けられる、と言いついで露伴の口述はなおしばらくつづく。

⑫ サ行ザ行とカ行ガ行との音の関聯

【相馬領でうたふ湯治歌<sup>(16)</sup>向ひ小山の崖<sup>がんげ</sup>の躑躅<sup>ツツキ</sup> ツツジが硬音をなせばギ 磁石<sup>ジンシャク</sup>を東京人はギシヤク 私<sup>ワタシ</sup>のタが少変して硬響をなせば遊里の語のワチキ 拗<sup>クネ</sup>ルはスネルと関係ある語 酒<sup>サケ</sup>をササ 酒湯をササユといふのは小兒語 との解も 鳥<sup>トリ</sup>をトト 銭<sup>ゼニ</sup>をゼゼ さうかも知れない 省略の累音といふべきである。 牙音 顎舌の位置 摩擦音であるのと破裂音であるのとの差】

⑬ ガ行<sup>(17)</sup>は二通りの響き 硬いガ行と ng<sup>ン</sup>ガ行と

【学校・学問・学者 中学校・小学・科学 異なる 但し専門学校・高等学校とか似而非学問 二語をなす時は必ずしも 誇<sup>ガクガク</sup>々々 罵<sup>ガウガウ</sup>々々 同音を聯ねた下のガ行音も軟化しない 二つのガ行音】

カ(香)の説がそのあとにつづく。香道<sup>(18)</sup>にくわしい露伴の蘊蓄であろう。

⑭ 【応神紀、いざ子どもの御歌に、わがゆくみちのかぐはし花たちばな、と見えるカグハシは香グハシ 拾遺集卷十577神楽歌の、さかき葉のかをかぐはしみ、のカグハシミと同じ クハシ 「神武紀三一年」くはしほ

こ千足の国、「記神代」くはし女を有りとときかして 精細微妙の義 万葉集卷391十六の竹取の翁の歌 カ黒シのカは カ弱シ・カ青シのカ 発語の辞 香の義に用ゐたものでは香の字を 万葉の仮名でカと訓でゐる例が多いのもその証 同集卷十223、芳（宣長曰、茸）を詠める、高松のこの峰も狭に笠立て、盈ち盛りたる秋の香の宜さ 卷十七3916、大伴家持、橘のにはほへる香かもほとゝぎす鳴く夜の雨にうつろひぬらむ 卷一十450、治部大輔市原王、梅の花香をかぐはしみ遠けども心も萎ぬに君をしぞ思ふ 香をカヨリ・カヨル・カヨス カク・カヨスとも カク・カグとも コリとも カザとも 考証めいた事は一度して置いたものがある コリとはカヨリの約でもあらう。 皇極紀元年秋七月雨を祈るの条、時に蘇我大臣手に香鑪を執りて香を焼き、の香はコリと 万葉集卷十六382の香・塔・厠・屎・鮒・奴を詠んだ歌、香塗れる塔にな依りそ川隈の屎鮒はめる痛き女奴 古訓コリ沙石集にも見える齋宮忌詞の、堂をコリタキ 焼香の義 即ちコリは後世香道香といつたのに相当し カヤカヨリが香氣 香材 動詞の嗅グ 目グ 手グ 肩グ 股グ 鼻グとは言はない 砥グ 輪グ 香を活かせて香グ 薄グ・平グ・柔グ 結果を カヨリは香居りの義 猿蓑の句、夕立や檜木の臭の一しきり、の臭字はカザと訓む カザは香矢でカザス 通フは香ヨフでヨフは漂フ 感クも香負ク 負ク 婉柔に相手に順ふ義 カヨリは佳香のみ カは佳香をも悪臭をも 葱の類は皆キ又はギ ネギ・アサツキ・アララギ・ワケギ・カリキ 擬宝珠 ギボシ・ギボ・ギボウはギは葱・ホは穂と解すべきだ。キは一種の激しい匂の辛さ カの遷移 辛シも香イラシ 名詞をもカラシ 形容詞を名詞にする時はイ列になる習ひ カラキ・カライにならずに終止形のシとなつた例には、涼シのユズズシや重シの沈子や明シ 萌スのキ 香射ス キナ臭シのキも香であらう。 息のイは氣息の古邦語であるが、キは口中の臭ひでもあら

うか。酒もキ クも亦カの遷つた音 源氏物語初音の卷、火桶に侍従をくゆらかす、のクユラカスは香揺ラカス 侍従は薰物の名 クユル・クユラス・クブ・クベル・クスブルなどのクも香 樟木クスノキのク、麝クジカノク九年母クネノボも填字 桂カツラも香出ヅルのギであるかも 桂にはメカヅラ・ヲカヅラ 倭名抄には桂をメカヅラ 本草などには牝桂といふ称も 性能の強からぬをメカヅラ 我が国には ヲカヅラ少い 瘡をカサ・クサ 臭気 かも知れぬ カブル・カブレル ブルにクスブル・イブル 或は香帯ブかと

も 蚊カブス燻を新井白石の東雅(10)には ブスは附子 蚊の毒物の義 イブスと同じでカは香がもとも知れず、煙ルモブス・ブルであるから、ケもカの遷移である。腐の義のクタス・クタル・クサス・クサル、朽ちの義のクサシ カもキもクもケもコも香・匂・臭 但し氣をキといふのは字音 關係が無い】

⑭ キ・ク・ケの説。

【木もキでありコである。 キリ コル 木キ樵コリ 木に木を揉んで火を取るのも鑽ルといふ。 人の子 魚の 鯛 虫の蚕 海鼠ナマコ 粉 籠 コ 粉コナのナは胞衣エナ、キナ臭シのナと同じで意味なく 曆ゴヨミはカヨミ、屈カゴムはカガム、潜コゲルはクグル、扶コジルはクジル、憧アコガルはアクガル、何イツコ処コハイヅクであり、踵キビスはクビスであり、常盤トキハはトコハ 黄金コガネはキガネ・クガネ 泛ウキ子はウケ 古今集卷第二十1097、甲斐歌、甲斐が嶺をさやかにも見しがけ、れ無く横をり臥せる佐夜の中山、のケケレは心ココロであらう。荻生徂徠の南留別志(11)に、ケケレナクをケケレナクと云ふは甲斐の国の郷語なり、今も遠江國の者は九つをケケネツと云ふと元喬云へり 眨ケクスはコナスとも 大徳トコをダイトコ、消息セウソクをセウソコ 赤アケ・酒サケ・長タケ(高)・竹タケ・家ヤケ(宅)等はアカ・サカ・タカ・タカ・ヤカとなる 茎クキは茎立クダダチの如くククとも 槻弓ツクユミはツクユミ 月夜 ツクヨとも 水潜ミツクゲル ク・グが入れ代りもする 聯

音法 牙山 ギッパ山 側ハは ガハと 寄居虫の古名カミナがガウナ 雁皮がガンピ 格天井 ガウト  
 ガ行では輝アカガリともアカギレとも 大角豆ササゲともササギとも 藜ササゲで鳥を捕へる器のハガがハゴと 糠蚊がヌカゴ  
 莎草クダの繩をクグナハと クゴナハとも 反古ホグをホゴとも 育ムハゲクヲハゴクムとも、解ルホクをホゴルとも 愛の義  
 のメグム・メグシは酷の義のムゴシと通じて カナシに哀憐と悲哀の二義 万葉集十一2560、正述心緒、人  
 も無き古りにし里にある人をめぐしや君が恋に死なせむ、のメグシは惨ムゴシ メがムに、グがゴに通じた 香・  
 孝・考・講・更・高・幸・康・好・交・行・向等の字音カウ、甲の字音カフは発音コーで、剛・強・傲・豪・  
 毫・郷・号等の字音ガウ、合の字音ガフは発音ゴーであり、邦訓でも頭カウヘ・督カウの殿トノ・笄カウケシ・蝙蝠カウモリ・楮カウツ・糝カウチ・紙搓カウヨリ  
 等のカウもコーであるやうに、但し動詞の飼ふ・買フ・易フ・交フ・支フ 必しもコーとはならない。一  
 般にア列の単音 ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ等を語本とする動詞の場合には、ウ列の軟い音と合してもア  
 列音がオ列音と変じない習慣が存する。堪タフは必しもトーとはならず、綯ナフ・萎ナフはノーとはならず、舞マ  
 フは必しもモーとはならずに済んでゐる。】  
 カ行とハ行との傍遷の例は少くない、と露伴はいう。得意の話題であつたらうか。

⑮ カ行とハ行との傍遷

【上海・漢口・香港・河内 海・漢・香・河等の頭声は支那音ではh 我が国ではこれらをカイ・カン・カ  
 ウ・カとkに発音 海鰻 我が国でハモ⑮ 支那の字音をその俣⑮に輸入したからhの音 カ行は内気を破裂  
 喉蓋⑮に近く行ふので喉音のア行やハ行とも音質が似てゐる。猿楽サルガクはサルガウとも 枕草子に、つれぐなく  
 さむるもの、男のうちさるがひ物よくいふがきたる、のサルガヒ 猿楽をハ行に カ行ア行ハ行の遷り易い

といふ例 印度は懸度とも *kha, khi, khu, khe, kho* の *k* が脱落すれば *h* 即ちハ行の音 *kh* が脱落すればア行の音 峽は間と通じて 衝立・濃茶がツイタテ・コイチャ 突食ムがツイバム 埼玉がサイタマ 柳笛がヤナイバコ 鞋・襪がワラウツ・シタウツ 謂はゆる音便 キ・ギがイ音便になる例 凧は木枯ラシでなく木嵐が 含ムはククムともフクムとも 岐神はクナドノカミとも 燻ブはクスブでも 日に日に 日はケでもあり、母はカカとも 嚼ムと食ム 万葉集卷五892、山上憶良の貧窮問答歌の 咳ブカヒは万葉仮名之可夫可比 古義などでは可は波の誤でシハブカヒだとしてゐる シカはシハの訛つたのだとも 鋸の古名ノボギリがノコギリになつた例】

サ行タ行は親声の關係、サ行とカ行とも親しい、と露伴はいう。「前に言つた如く」というとおり、半舌半顎の摩擦音と牙音の破裂音との差にすぎないということであろう。「カ行とタ行とも亦親しかるべきである。」という。

⑩ サ行とタ行・カ行と

【幸はサキでもありサチでも 但しサシとは言はぬ 嫉妬の義の焼餅は焦がる、洒落かも ヤツカム ヤキモチとヤキモキ カッチリとカッキリ 少し違ふ 易の乾は即ち天だ。乾竺は天竺 県・捐の字 天竺の天に填てる 賢毒は天毒 謂はゆる仮借の字 犁軒がラチンになる 軒・鞭が *k* の声で *t* の声に遷り得るから *ch* が極柔かな時にはシ 少し硬くなるとチ もっと硬ければキ・クとなるのと同じ例】

⑪ カ行と唇音のマ行と。「さして取立て、言ふ程でもないが」という。

【カゴメは鷓 *ngo* の *n* あらはれ *g* 消えてカゴメ *g* あらはれ *n* 消えてカゴメモは *go* であるが *n* と *m* との



混乱 神奈備山のカンナミは即ち神和カミナキ オタマジヤクシ 江州多賀社 杓子のお多賀杓子(18)が訛った 寛永十一年板の尤草紙(18)、まがれる物の品々の段、大工のかねや蔵のかぎ、檜物屋の仕事、なべのつる、お多賀杓子 蛙の子 ngのgが顕れる例は相の音seang摸の音mo良の音lang 硬発してガ、軟発してジの声をもなしはせぬけれども、本具の韵 相模のseangmoがサガミ、相良のseanglangがサガラ 即ちgのあらはれ 久良はクラギ 余綾はヨロギ 愛宕はオタギ 美嚢はミナギ伊香はイカガ 香山はカグヤマ 香美がカガミ 当麻はタギマ 勇礼はイグレ 鐘礼はシグレ】

⑱ガが更に硬い響きをなして

【グワラリ グワ 即ちgwaともなり カが硬発してクワ 即ちkwaとも 標記法は炭俵の句2213、屏風の陰に見ゆるくはし盆、の如くグハクハとハを用ゐて 正保三年板の毛吹草(18)には、霍乱をクハ克蘭、萱草をクハンザウ、荒神をクハウジン、皇居をクハウキヨ、火宅をクハタク、喧嘩をケンクハ、花壇をクハダン】

⑲カ行の拗音キャキュキエキョ、ガ行はギャギユギエギョの例

【驚愕の声 キャッだの 擬声語のキュー・キュッだの ギュー・ギユッだの ギャッだの キョトンのキョだの ギョツとするのギョだの 赤子の産声は日本ではオギャーであるが支那でも因地与ギャの音に 標記法は最古の例では逆をギアク シャをシア 釈の音シヤクをシアク 壤の音ジャウをジアウ】

昭和二十年二月にはじまった「音の各論」の口述筆記は敗戦の九月にとまかくも終えた。「必しも剗切でない語例」は止むをえなかったことであろう。「置しい蔵書にも離れた地にあつて身は長く病中に居り、老いて記性も甚だ衰へてゐるから」という。「多くは記憶の中から」ともある。驚くべき記性である。「取捨は人々の自由」。

しかし割愛が許されようか。つとめてその引例と典拠とを伝えようとした小論の主題でもあった。

## 七 聯音

「聯音」は昭和二十年十一月一日雑誌『文藝』に載った。昭和二十二年五月三十日発行の単行本『音幻論』では最後に置かれたが、発表としては同誌十二月一日掲載の「累音 対音 省音 添音 倒音 擬音」に先立つものである。最後に置いた事情はわからない。

音を聯ね言ふと前の音の韻が無いわけには行かず、前の韻が後の声に影響しないわけに行かないので聯音の法といふことが見出される。そして後の声に影響するのは前の韻のもつ性質が加被されることから起つて来るのである。

すなわち「聯音」であり、前後の「韻」と「声」とが響きあう幻性である。いわゆる連声や連濁、ガ行音の硬軟、音便や長音や拗音、鼻音やp t kの入声などにわたる現象の総称であろうか。露伴のいう事項を追って番号をつけ、【】内にその語例を示そう。

① m・nの韻【三位 陰陽師をオムミヤウジ 銀杏・元和・延引・云々・因縁・輪廻・安穩・観音・感応・勤皇・山王・天王等 発意がホツチ】

② ガ行ギャ行に硬軟二通り【玉石 金玉 逆賊・逆心 莫逆・順逆 御寝と出御 十五・二十五 一五ガ五 三五十五 以後 困碁 珊瑚 五合】

③ ヒ・ク・ミ・ムなどが仮名遣ウとなり発音オとなる【妹人・弟人・玄人・素人・問ヒテ・競ヒテ・習ヒテな

- どがイモウト・オトウト・クロウト・シロウト・トウテ・キノウテ・ナラウテ 格子カクシ・斯クシテ・赤ク・高クなどがカウシ・カウシテ・アカウ・タカウ 髮搔カミガキ・手水テミツ・神戸カミベ・寄居子カミミナ・豊紙等トヨシガミ 手向タムケ・日向等ヒムカがカウガイ(筭)・テウヅ・カウベ・ガウナ・タタウガミ 手向タムケ・日向等ヒムカがタウゲ(峠)・ヒウガ】
- ④キ・ギなどがイとなる例【后キサキ・幸サキハヒ・焚松タキアツ・衝重ツキガサネ・月立ツキタチ・焼刃等ヤキバ 書キテ・咲キテ・聞キテ・大キニなど 柳ヤナギ筥ハコ・続ギテ・嗅ギテ・研ギテ】
- ⑤ミ・ムのマ行音がウになる場合 ンとなる例【女メナがヲンナ、紙袋カミブクロがカンブクロ、髮差カミザシがカンザシ、上達部カミダチメがカンダチメ、公達キミタチがキンダチ 読ミテ・噛ミテ・蹈ミ込ムがヨンデ・カンデ・フンゴム 香カウバシがカンバシ 困コウズがコウズ、紺屋コンヤがコウヤ、乱ランガハシがラウガハシ】
- ⑥バ行のビも亦マ行のミと甚だ相近い 従つてウ・ンとも遷り易い【淋々オビモノシがサウザウシ 佩物オビモノがオンモノ、飛ビテ・結ビテ・忍ビテ・などがトンデ・ムスンデ・シノンデ】
- ⑦ナ行の音のニがンと変るのは普通の変化【大贄オホニヘがオホンベ・樺カニハがカンバ、雁皮カニヒがガンピ、如何イカニがイカン、何ナニダがナンダ】
- ⑧ハがンと変つたの ヒがンと変つたの ホも亦ンとと変るけれども、この方は僅少な例【童部ワラハベがワランベ 思オモヒ量ハカルがオモンバカル 思オモヒ見ルがオモンミル 顔カホバセをカンバセ オホバコをオンバコ 殆ホトホトをホトンド 南朝四百八十寺の八十寺 ハッシンジ 十ジツをシンと読む】
- かように韻まで変わりゆくのは仄字↓平字の変移であつて、平字↓仄字、仄字↓平字は始終あることであるが、それは外国流のことだからしばらく措く、と露伴はいう。「ともかく音便といふやうな事を取立てゝ考へてウ音

便としたり撥音便としたりするには当たらないのである。」とあるように、露伴は「仮名遣」・「音便」といった用法や区分をよしとはしていなかったようである。

⑨ 継ギテ・継ギタ・嗅ギテ・嗅ギタなどのギがイに軟化すると下のテ又はタが今度はデ又はダとなつて必ず硬化する

⑩ 妹人・弟人・玄人・素人等はイモウト・オトウト・クロウト・シロウトでいい

⑪ トが重くドに変わる【商人<sup>アキヒト</sup>・狩人<sup>カリヒト</sup>・蔵人<sup>クラヒト</sup>・仲人<sup>ナカヒト</sup>（又はアキンド）・カリウドクラウド（又はクラウド）・ナカウド<sup>ワラグツ</sup>・藁沓<sup>シタグツ</sup>・下沓もワラウツ・シタウツ】

聯音によって音が重くなるのは主に促出の作用によるが、

⑫ 同音の語でもさまざま【下木はシタキで下着はシタギで、借越カリコシで仮輿はカリゴシで、築替はツキカへで月替はツキガへで、出端はデハナで出花・出鼻はデバナで、出端はデハともいひ出齒はデバもしくはデッパ同じ語でも玉出はタマデだが玉手箱といふ時にはタマテバコ 手取はテドリで手取鍋はテトリナベ 芽バム・黄バム・気色バム・汗バム・貴バム<sup>アテ</sup>・煤バムや芽 Gum・皺 Gum・泪 Gum や萌ス<sup>キサ</sup>・香ザス<sup>カ</sup>・芽ザスなどのバム・ Gum・ザス】

⑬ いわゆる促音便は、ヒ・リガツと変じたのでも活用でもなくて、ただ促<sup>ツマ</sup>つて発音される際にその音が脱落消滅するに外ならない【買ヒテ・給ヒテとか取手<sup>ノリテ</sup>・祝詞<sup>ノリト</sup>・堀田<sup>ホリタ</sup>とか売リテ・乗リテ・散りてとかがカッテ・ヒロツテ・トツテ・ノツト・ホツタ・ウツテ・ノツテ・チツテ 打チテ・勝チテ・断チテ・待チテ・持チテ・別チテなどがウツテ・カッテ・タツテ・マツテ・モツテ・ワカッテ】

⑭ 八行の音へ聯り続く例 その時には前の音の入声の潜音pが顕発作用する【専<sup>モハ</sup>ラ・矢張<sup>ヤハリ</sup>・土手腹<sup>ドテハラ</sup>・向腹<sup>ムカハラ</sup>・塵<sup>チリ</sup>葉<sup>ハ</sup>・下端<sup>シタハ</sup>・真平<sup>マヒラ</sup>がモッパラ・ヤッパリ・ドテッパラ・ムカッパラ・チリップパ・シタッパ・マッピラ】

⑮ 八行以外の音は変化しないのは、やはり入声の關係kもしくはtの声へ聯るから【徳利<sup>トクリ</sup>がトックリ、吃逆<sup>シヤクリ</sup>がシヤックリ、ビクリがビックリ、コクリがコックリ、シカリがシッカリ、擦枯<sup>スレカ</sup>ラシがスレッカラシ、飾り氣<sup>シヤクリ</sup>がカザリッケ、カラキシがカラッキシカタキがカッタキ、ツツクがツツク】

⑯ p t k 以外にsの声へ続く音も促音になることがある s音サ行とt音タ行と甚だ近似音【真青<sup>マサヲ</sup>がマッサヲ、ドサリがドッサリ、ヅシリがヅッシリ、薄<sup>ウス</sup>ラがウッスラ、ノソリがノッソリ】

⑰ sが前の音の入声tの韻を承けてtsになる例もあるし、先づ大体に於てh t k へ聯り続く時に促音となりうるその時にhはpとなる【トッサンとも トツアンとも真直<sup>マッスグ</sup>はマツツグとも】

ここまで話してきて、露伴は「韻」のときに触れた入声を手短かにいま一度説明しようと思つたようである。「漢字の平仄の仄に当る上・去・入の三声」のうち、入声とは

屋・沃・覚・質・物・月・曷・黠・屑・藥・陌・錫・職・緝・合・葉・洽

の十七の韻<sup>⑱</sup>に分れるもので、これらは尾韻にp t kを有する。「我が国語の研究には入声のことが顧みられてゐないといふのをその時にも話して置いたが、邦語にも入声が無いのではないことは今の例などからも分るかと思ふ。」

⑱ 聯音する下の音に重い音がある時には、聯音の変化が無いのが常【葦芽<sup>アシカヒ</sup>と葦貝<sup>アシガヒ</sup>、搔首<sup>カキクビ</sup>と垣杙<sup>カキグヒ</sup>、小鼓<sup>コツツミ</sup>と小包<sup>コツツミ</sup>、手番<sup>テツガヒ</sup>と手遣<sup>テツカヒ</sup>、突傷<sup>ツキキツ</sup>、搗杵<sup>ツキギネ</sup>、弦弾<sup>ツルバシリ</sup>、弦走<sup>ツルバシリ</sup>、万葉集卷十一 2796の寄物述思、水泳る玉にまじれる磯貝の片恋のみに

年は経につゝ、の水泳ルはミズクグルであるが、卷十四<sup>354</sup>の東歌、妹が寝る床のあたりに石泳る水にもがもよ入りて寝まくも 石泳ルが伊波具久留 その時はクグルがグクル】

①⑨ 決して重い音が二つは重ならない 時には本来の軽重が入れかはる事もある【伝の字は岨伝といふ時はソバツタヒ 手伝といふ時にはテツダヒ】

②⑩ 必しも下に重い音が無くとも聯音の変化が見られないこともある【足継<sup>アシツキ</sup> 足附<sup>アシツキ</sup> 合判と間版<sup>アヒバン</sup>、炭搔と墨書<sup>スミガキ</sup>、

取附と取次<sup>トリツキ</sup> 山鳥<sup>トリツキ</sup> ドリ 水鳥<sup>トリ</sup> トリ 小川はヲガハで大川はオホカハ 唐草・七草の草はクサで秋草・千草の草はグサ】

②⑪ ンといふ音の幻性（謂はゆる撥音便の下に在る音が重くなるといふこと）【本居宣長も玉かつま一之巻で注意して、曰く たとへばネモコロ ネンゴ 此例多し心得おくべし、といつてゐる。 甘ズ・重ズ・軽ズ・難ズ何かがその例】

要するに聯音の法というものについて、露伴は「普遍妥当なる通則を打樹てるといふが如きは固より難いのである。」とする。ただし観察をすすめる便宜として、かりに「聯音」のほかに「累音・対音・省音・添音・倒音・擬音」という耳慣れない用語を設けている。

## 八 累音・対音・省音・添音・倒音・擬音

「累音 対音 省音 添音 倒音 擬音」は〈音幻論〉の最終稿として昭和二十年十二月一日雑誌『文藝』にまとまって載った。敗戦後の転居先伊東での口述筆記であり、昭和二十二年五月三十日発行の単行本『音幻論』

では「聯音」の前に置かれた。

(一) 累音

言語は音をもって成る、しかし象法俱生の理があり法外の法も亦存する——、と説きおこし、「累音」の項からはじまる。同じ声音をかさねた累音がカカーカガのように軽重の違いを生ずるのは、意義の小大・寡多によるという。露伴は声音の軽重といて、清濁という用語を使わない。甲斐国酒折宮の火焼翁が倭建命に唱和した、「かぐなべて夜には九夜日には十日を」の例をあげ、累音の軽重と意義の小大・寡多について観察がはじまる。<sup>(13)</sup>

①【日々並べてであるうが、カガ。驚が鳴くカガ鳴クも猿の鳴くカガメクもカガ】

②ササーサザ【多くある小々波・小々石はサザに変わるのに小々栗・小々蟹のササは変わらない。サザナミのサザは浪の音を擬した語であるといふ説 古例 古事記仲哀天皇の条、沙沙那美、応神天皇の条、沙沙那美、書紀神功皇后の巻、狹狹浪、欽明天皇の巻、狹狹波、天武天皇の巻、笹ササ浪 万葉集<sup>326</sup>に沙邪礼浪サザレナミと書した例も 後世にはサザナミ・サザレナミ】

③【乳チをチチ、千々に乱れると 千々に碎ける 小児語に寝ることをネネ、目をメメ、手をテテ。手に手にをテンデ。ンの音につらなってテがデとなつた 葉はハツパ、これは音の促出による変化。木の意味が壮大になつて多くを指すときに木々キキ、瀬が多くある時にはセゼ、津々浦々も多くの津を指してツツ、幅ハバは端から端までの義 端の意味が壮大だからハバと音転し、ハハとはいはない】

④【端々ハシバシ、橋々はハシバシ 川々はカハガハ、谷々はタニダニ、島々はシマジマ、国々はクニグニ、寺々はテラデラ、神々はカミガミ、人々はヒトビト、方々はカタガタ、声々はコエゴエ、口々はクチグチ、節々はフ

シブシ、粉々はコナゴナ、花々はハナバナ、草々・種々はクサグサ、様々はサマザマ、品々はシナジナ、事々はコトゴト、時々はトキドキ、月々はツキグキ、年々はトシドシ、先々はサキザキ、末々はスエズエ、隈々はクマガマ、端々はツマツマ、隅々はスミズミ、下々はシタジタ・シモジモ。しかし其々はソレゾレとなるが此々はコレコレ、此方々々はコチコチ。「自分の側の事物を示す時にはさして意味の壮大を来さないわけだからであらうか。】

⑤ 累音が重く変じない場合【暇々もヒマヒマ、度々もタバタビ、辻々はツジツジ、門々はカドカド。唯々次々 飛々「聯音の際に聯る方に重い音を含む場合には重く変じないのが通例であることに基く。】

⑥ 【懲々はコリコリ・コリゴリ両方にいう。】  
 ⑦ 【兼々・且々・呉々・交々・然々・泌々・熟々は意味を強めるから音も重変するが、斯々・偶々・熟々などは変じない。暮々・消々・散々・切々・取々・好々・惚々・冴々・晴々、久々・早々・近々・遠々・白々・黒々・遙々・広々・高々・太々・細々など。】

⑧ 三音の例【一ツ一ツはヒトツビトツ、処々はトコロドコロだが、一人一人はヒトリビトリともヒトリヒトリともいう。溜り溜りや泊り泊りは変じない。代り代り・返ス返ス・重ネ重ネ】

露伴は重累によって声音に軽重が生じる事実をあげて思案するが、通則を急がない。

木を単独ではギといはず日をビともいはないし、人をビト、一ツをビトツとはいはないのであるから、重累によつてこの場合のギ・ビの如き声音が生ぜしめられるといふこと、そしてそれは単独には意味の分らない音であるといふことは言へるので、さういふのは声音言語の自然が起した変化であるから法則が無くてはな



らぬが、通則のやうなものを示すことは尚早しと考へられる。但しかゝる事実があることは認めて置かなくてはならない。

「累音」の項のおわりに露伴は、先に述べた「聯音」およびこのあと述べる「対音」・「省音」・「添音」とのつながりに触れている。累音は変化の仕方からは聯音の場合と似ており、重累の形から対音の場合と似たものがある。また省音・添音の場合と似たことがある、という。

⑨累音の中の省音【朝<sup>アサ</sup>朝<sup>アサ</sup>はアサナサナ、八<sup>ハチ</sup>々はハツパ、枝もたわゝのタワワはタワタワ、野蒜のアララギはアララすなわち疎<sup>あたら</sup>々に生ひたキの義でキは葱、ハラハラをハララ、ホロホロをホロロ、トヲトヲをトヲヲ、キラキラをキララ、ウラウラをウララ、愈<sup>イヨイヨ</sup>々をイヨヨ。】

⑩累音の添音 ある語に同じ音を添加して累音の形となすこと【万葉集卷五892、山上憶良の貧窮問答歌の長歌  
綿も無き布<sup>にの</sup>肩衣<sup>かぎぬ</sup>の海松<sup>みる</sup>の如わゝけさがれる檻<sup>か</sup>樓<sup>ふ</sup>のみ肩に打懸け 凝<sup>コ</sup>ルがコゴル、支<sup>サ</sup>フがササフ、吹クがフ  
ブク、撓<sup>ウ</sup>ムがタタム、突クがツツク、曇ルがクグモル】  
ワワケの語の如きは単に累音添加による音楽的なものであり、つぎの例のビンビ酒やゴンゴリなどは美酒・鮎<sup>ゴリ</sup>といふ詞の頭音ビ・ゴをかさねて調子を添えたまでである、という。

⑪【曆くばりて先々のびんび酒の麴の花ちろちろ目にて立帰り（近松『大経師昔曆<sup>⑩</sup>』）

ごんごりのこひといふ名は耳に立つ（『伊呂波物語』）】

ごく僅少な語例であるが、として露伴はつぎの例を「累音」の項の結びにしている。

⑫一度累音であつたものがそれでなくなる【色<sup>イロ</sup>々<sup>イロ</sup>ナがイロンナとなり、蝗のバッタはもとハタハタの変化と

見られるやうなのを、累音の重声として好い。】

(二) 対音

対音というのは変な音で、と切り出して口述はまず例をあげている。

ギクシヤクとかチグハグトカビラシヤラ の如き語

「直接に音楽的に或感情をあらはすのによつて生じたことであつて、正対もしくは反対の關係をもつた音である。」  
 「殊に俗曲のやうな音楽的の言語が綴られる場合に少からず見受けられる。これを仮に對音と名けて置く。」

①【ノラクラ・ノタクタ・ヌラクラ・チラホラ・エツチラオツチラ・ヤッサモツサ・ドサクサ・ドタバタ・ジタバタ・ベタクタ・ゴタスタ・アタフタ・アヤフヤ・チヤホヤ・テンヤワンヤ・テキパク・ペチャクチャ・ムシヤクシヤ・メチャクチャ・アパスパ・アベコベ・ツベコベ・ヘドモド・ドギマギ・デコボコ・ガタリピシリ】

②意義がなくはない對音【モクリコクリ(蒙古と高句麗との事ゆえ論外) アタフタ(アワテフタメクに關係があらうか) アヤフヤ(京都の綾小路麩屋町だとも。怪シ・危シと關係するかもしれない) ウヤムヤ(有耶無耶はおそらくは填字、古歌にウヤムヤの関、古い對音から出来た詞) シドロモドロ(源氏宇都保の物語類和歌古今六帖卷六<sup>375</sup>の、まめなれどよき名も立たず刈萱のいざ乱れなむしどろもどろになどの歌 シドロは臍次も無き義モドロは紛然として混乱するの義 又一説に足取り 戻キの略転とも 昔の對音でないかと疑へば疑へる) トツオイツ(取リツ置キツであらうが、擦ツタ揉ンダのやうに音の對出的な響き)】

支那の形容詞は多くこの方法、日本にもこういうことがあるのは確かだ、と口述しながら露伴の興趣はなお尽



泡<sup>アワ</sup> 櫃<sup>カシ</sup>は堅<sup>カタ</sup>シ 柏<sup>カシハ</sup>は炊<sup>カシギハ</sup>葉<sup>ハ</sup> 粥<sup>カユ</sup>は炊<sup>カシギユ</sup>湯<sup>ユ</sup> 栄<sup>サカ</sup>ユは幸<sup>サキユ</sup>映<sup>ユ</sup> 標<sup>シメナワ</sup>繩<sup>ワ</sup>は 尻<sup>シリクメナワ</sup>籠<sup>メナワ</sup>繩<sup>ワ</sup> 幣<sup>シテ</sup>は沈<sup>シツ</sup>リ垂<sup>タ</sup>レ戦<sup>タタカ</sup>フは敲<sup>タタ</sup>キ合<sup>ア</sup>フ 机<sup>ツクエ</sup>は衝<sup>ツ</sup>キ据<sup>ス</sup>

エ 喉<sup>ノド</sup>は飲<sup>ノム</sup>門<sup>カド</sup> 拜<sup>ラガ</sup>ムは折<sup>ラ</sup>リ屈<sup>カガ</sup>ム】

②上略・下略【キリギリスをギス 湯帷子<sup>ユカクヒラ</sup>をユカタ 御座イマスを御座イ 堂鳩<sup>ドウキウ</sup>をドバ 蒿雀<sup>アヲシトド</sup>をアラジ 十二支

のネズミを子<sup>ネ</sup>、ウサギを卵<sup>ウ</sup>、へミを巳<sup>ミ</sup>】

## (四) 添音

「本来の詞の中へ或音が添加して入る」のが「延へる」添音。「省音」の逆である。

①添音【掛ケムモがカケマクモ、願フハガネガハクハ、見ルがミラク、恋フがコフラク、足<sup>タ</sup>ルがタラフ、イム<sup>タクス</sup>がタタズマフ、流<sup>ナガ</sup>ルがナガラフ、振<sup>フル</sup>ル・震<sup>フル</sup>ルがフルフ、牡丹<sup>タン</sup>がボウタン、蓑<sup>メカ</sup>荷<sup>カ</sup>がメウガ】

しかし「延へる論」ばかりでは納得できない場合も起きてくる。「企<sup>タクラ</sup>ムはタクムの延、蕩<sup>トロ</sup>カスはトカスの延とすればラ・ロの音は一体どこから来つたのであらうか」といい、「国語学的な解釈説明」はそれとして承認して、声音の側から言語を取り扱う立場にたつ。

②訳の分らない添音【七部集炭俵の孤屋の附句<sup>2365</sup> 何年菩提知れぬ柝<sup>ナシ</sup>の木 何年菩提<sup>ナンエンボダイ</sup>は何年程<sup>ナシ</sup> ホがボに ドがダイとなつてボダイ もう一段変化すると俚語にいわれる何年ボクタイ ボダイの入声のクが強くあらはれ出て来たのである。 乏少はバフセフだが読み癖でボクセフ、壹越をイチコツ。】

越のエツ・ヲツといふ軟い音がどうしてコツといふ風に変ずるのか。それは——、と露伴はいくぶん居ずまいをあらためた気配である。この年の一月号『文藝』「韻」の早々に富士山と浅間の平声・上声・去声のこと、二月号『文藝』「音の各論」の始めには平・上・去・入のこと、それぞれわずかに言い及んではいた。敗戦後の晩秋

に漢字音の講釈である。『広韻』も「反切」もそろそろ通りにくい時世である。しかし頓着しない。

【漢音ではワ行とカ行とは相渡る理があつて例へば皇はワウ・クワウ黄もワウ・クワウであり、和はワ・クワ、廻はエ・クワイ、越の字も広韻には戸括の切、音活とあり即ちクワツの音があるからだとも解し得られるが、又イチのchが硬く発音され、ばキとも言へる。】

③コの音の添加【落チルを東京の俗言でオッコチル また落トスをオッコトスとも 寧ろオッコチル・オッコトスの方が並の詞と オツの入声の韻がコの音を導き出した】

④コ・カの音の添加【引キ抜クがヒッコヌク 載ルがノツカル ↑引ツ越シ・引ツ込ミ・引ツ張り・引ツ吊リ (ヒッコヌクのコは添音と見るのが正しい)】

⑤入声のpペ・ポ、チの添音【ウスツペラは薄氷・薄グのウスラが促音になつて、スツの入声のpがペとしてあらわれたものと考えた方がよからうか 尻尾がシツポ 左利きをいふギツチョ(無器用をブキツチョといふ如く左器用すなはちヒダリギツチョの上略 チの音はキの入声の韻に加被され誘はれて出たのであらう)】

⑥発音上の習慣からんの音が語中に入つてゐる添音【鳶をトンビ、女鳥をメンドリ、男鳥をヨンドリ、蝸牛をデンデンムシ、冠をカムリ、吃りをドンモリ、余りをアンマリ、既をスンデ、等をナンド、度をタンビ、俣をマンマ、如クバを如クンバ (ンはマ行バ行等の本具の音) 自動車がズンドーシャ (ダ行音がンを加へ) 真名をマンナ、南をミンナミ (仮字がカナナ、東がヒンガシ に誤り習つたのであると本居宣長は玉かつま八の巻で論じてゐるが) 同じがオンナジ、真中がマンナカ、皆がミンナ、何モがナンニモ (ナ行音にも本具音が無いことはなく、ガ行もンガのガとすればンが顕発したのだとして差支へない) 尖ルがトンガル

コグラカルがコングラカル又はコンガラカル（ンガのンが働いたもの）】

また、わざわざ殊更に言語を不明ならしめて自己の同類のみに意志の疎通伝達を図る「挟み詞」というものがあり、我々のいう自然の添音の語とは違うが、とことわって例を示す。

△挟み詞【客<sup>キヤク</sup> キキヤカクク、女<sup>メナ</sup> ヲコンナカ、肥大漢のデブツチヨ デケブクツクチキヨコ（同行の力行音を挟み入れたり） 大黒<sup>ダイコク</sup>をダライコロクル（ラ行音を入れたり、或は何となく随意に挟んだりする）】

△逆に省音の用語【気障<sup>キザハ</sup>りをキザ、清酒<sup>セイシュ</sup>をセイ、割前<sup>ワリマヘ</sup>勘定<sup>カンテイ</sup>をワリカンといふ類】

「主として江戸時代の遊里に於て用ゐられた隠語である」といい、もちろん共に添音・省音の中に取入れて談論すべきことではない、と「添音」の項を結んでいる。

### (五) 倒音

外国の語を聴き取り、又または小児が父母の語を聴き取る時などには、聴取発音の意識不明から倒音ということが起りやすい。「つまり言語の音を顛倒して言ふこと」とする。辺陲の老婆など、はなはだしきは貴婦人の中にも無いではないという。

①【ステーションをステンシヨ 茶釜<sup>チャブ</sup>をチャマガ 晦日<sup>ツヨモリ</sup>をツモゴリ 体<sup>カラダ</sup>をカダラ だらし無しといっているダ  
ラシはシダラの倒音 新シ<sup>アキラ</sup>は古くアラタシであり 手弱女<sup>テヨメ</sup>をタヲヤメ タヨワメの声通倒音 倒音がかなり古くから存したという証になる】

△【蛤<sup>ハマグリ</sup>をグリハマ、一杯<sup>イチパイ</sup>をパイイチ、公園<sup>コウエン</sup>をエンコウ、筆筒<sup>タンヌ</sup>をスタン、壁<sup>カベ</sup>をベカ、水<sup>ミヅ</sup>をヅミ、夜<sup>ヨル</sup>をルヨ】

悪徒の仲間では故意に倒音を合い詞のように利用しているが、隠し詞と同様、「これは別に隠語の論をする時

に言ふべきである。」

(六) 擬音

「もとそのものの体が発する音に擬してその者をあらはす事を擬音(15)といふ。「擬音」という用法には擬声語・擬態語・オノマトペにない味わいがある。鳥の名にその例が多いと露伴はいう。中国には「鳥自呼(16)名」と埤雅(17)にあり、蘇東坡の句にも「鳥不知名声自呼」とあり、禽言体といふ詩の一体までできている、鳴声を以て名とした鳥が実際に少なくない、としてホトトギスの鳴声をあげる。「ホはもとはボであつたらう。」

〔万葉集〕 4084 あかときの名のり鳴くなるほとぎす彌珍(18)しく思ほゆるかも

「名のり鳴く」とある。中国では不如婦とも書し発音はボジョクイ、擬音から出ている。

カッコウも鳴く声、古名をフドリ又はホドリ、中国では布穀。鶯も「ウーグヒスと長く引いて発音してみれば分るので、昔は音を長く引張る符(19)が無かつたまでである。」

古今集(20)の誹諧歌に、梅の花見にこそ来つれ鶯のひとくくといとひしもある、のヒトクは「人来に懸けた鳥の声の擬音であるがピョクピョクピョクなのであらうか。」とある。「百舌(21)もモは鳴声といふ説も」「ズはホトトギス・ウグヒス・カラスのと同じで鳥の義であらう」として、

百舌(22)、鴉(23)、雁(24)、雉(25)、鶏(26) (古くカケ)

をあげ、カケの例歌としてつぎの神楽歌を引き、「カケロと鳴くと見える」という。

庭つ鳥はかけると鳴きぬなり

「景行紀に出てゐる覚賀鳥(27)は鶯(28)といはれるがカクカは鳥の声と思はれる」。

鶺鴒<sup>ウグヒ</sup>、鶺鴒<sup>ケリ</sup>、都鳥<sup>スズメ</sup>、雀<sup>ツバクラメ</sup>、燕<sup>ツバクラメ</sup>

「都の字を填したのは歌人の方から生じたことで、ミヤと鳴くからミヤコドリ」ということは前にも一度話したとあるのは「近似音」の項をさしている。「メはコガラメ・カモメのやうに小鳥といふ事である」。

我が国に仮名が出来て名を伝えるまではサ行タ行の相通が多いのを以つて考へると 仮名を以つて響きを写したのだから、スヤツはチュにやうな音であつたかと疑へる。

というのはサ行音・タ行音の音韻・音声・音価にわたる推量を露伴がしていたことを物語るものであろう。また、小児語にも注意している。チューチュー・鳩ポツポという如く、

スズメはチュヂュメ ツバクラメはチュバクラメ 鳩(パト) 鳩のゴロスケ

露伴は延言約言による語義説をとらない。「雲雀は日晴の義、鶺鴒はひはやかに弱々しき義、鶺鴒は翅赤きより火焼の義、鶺鴒は古名ヒエドリで稗鳥の義とするが、」

いづれもヒは今のピでピパリ・ピパ・ピタキとなり鳴声だつたのではあるまいか。

としてヒヨコ(ピヨピヨ)をあげ、五位鷺の伝説やその声「月日星」にちなむ三光鳥については「確言を憚る」「深く問はずに置く」とした。以上を含め、以下の鳥類をまとめる。

①鳥類【百舌<sup>モズ</sup>、鴉<sup>カラス</sup>、雁<sup>カリ</sup>、雉<sup>キジ</sup>、鷄<sup>トウ</sup>、鶺鴒<sup>ヒバ</sup>(古くカケ) 覚賀鳥は鶺鴒<sup>ウグヒ</sup>、鶺鴒<sup>ケリ</sup>、都鳥<sup>スズメ</sup>、雀<sup>ツバクラメ</sup>、燕<sup>ツバクラメ</sup>、鳩<sup>ヒタキ</sup>(パト) 鳩のゴロ

スケ ユヒバリ 鶺鴒<sup>ヒバ</sup> 鶺鴒<sup>ヒタキ</sup> 鶺鴒<sup>ヒヨドリ</sup> ヒヨコ(ピヨピヨ) 鶺鴒<sup>ツル</sup> 五位鷺、千鳥<sup>チドリ</sup>、鶺鴒<sup>フクロウ</sup>、仏法僧、慈悲心鳥、三光鳥【

②虫類【蟬<sup>ゼミ</sup> ミンミン蟬 ツクツク法師(古くはクツクツ法師) ジガ蜂(古名スガル) キリギリス(今のコ

ホロギ) スズムシ(古歌の鈴虫、今の松虫)】



魚のギギ訛つてギギユウ（人を齧す故に河蜂・がばち・げばち）の話から例はバラける。

猿蓑の蘭雪の句1860、あやまりてぎうおさゆる鱸かな

笛、鈴、泡、嚏、屁（ペ） 吐クのハ、吹クのフ、呼ブのヨ、嚼ムのカなど

これらは「人の声を写したのだと昔の人が既にさう説いてゐる。」と結んでゐる。

「音幻論」の大詰めに近づいて、露伴は氣息をやや改めたようである。擬音に由来させた言語の声音起源説とも名くべきものは、しかし「早急無謀たるの譏を免れない」とはいう。

各諸民族の声音言語の学はそれごとく異なるわけだが、声韻の理は一つである。「支那では字法、世界的には声法といふものが研究されねばならぬ」。そして結びである。

字法は姑く擱くが、声法といふ一科が立てられて、人類声韻の変転推移の法則が研究され見出されて、そして古今世界の言語を横に貫き縦に統べるに至るのでなくては、人類言語の完全な了解は得られぬ。さもない間は吾人の言語知識は何時までも局部的、地理的、伝統的、歴史的に群盲摸象の陋態を続けるに過ぎぬであらうことを虞れる。

一言以つて蔽はば、吾人の声音言語の法はたゞ是れ一元万化であると称し得よう。

## 九 音幻

『音幻論』を一通り吟味してみて、いぶかしく思われることがいくつもある。

1 昭和初期の日本の音韻論の話題とくに「上代特殊仮名遣」に触れていないこと。

- 2 五十音図・仮名遣・直音・音便・清濁・方言等の用語を避けたと思われること。
- 3 独特な用語で例示を主にし、時と所を超え用語の規定を明かにしなかったこと。
- 4 引例が語彙に偏し音韻・音声・音価の別がなくアクセントに触れていないこと。  
裏返して見るならば、〈発声―聴取―復言〉を軸にした咽喉・口腔・鼻腔の動きと呼気の遷移とに露伴の関心が集中したと思われる、その結果として、いわゆる直音よりも平仄の仄のうちの入声やワタリの音・h音・気音などに、口述の大半を傾けることになったのではないかと考えられる。ごくありふれた「母音・子音」なる用語すら見当たらないのである。

露伴は「声法」を観察するにあたって、悉曇学・中国音韻学・日本韻学史あるいは歌学・国学などの実績は実績として、それらの用語がもたらす暗示力から自由でありたいと考えていたのではあるまいか。

中国の「字法」というものが研究されねばならぬとする一方で、露伴が耳の人でもあったことは疑いないだろう。電信技手として北海道西海岸の余市におもむき、モールス信号の長短符を相手に江戸っ子として土地の漁師ことばと近辺の会津方言<sup>(38)</sup>とアイヌ語<sup>(39)</sup>とを耳にし、それらの〈発声―聴取―復言〉の機構を記号と文字とに翻訳した人である。東京にもどってからは中西梅花と新体詩の脚韻<sup>(40)</sup>をきそった人でもある。いや、明治期前半の東京の下町が音曲の中に息づいていたことは澀江抽斎<sup>(41)</sup>や大槻如電をまつまでもない。幸田家の人が母の猷をはじめとして耳にすぐれており、妹の幸田延・安藤幸などピアノやヴァイオリンの大家をだしている。露伴の小説「観面談」(大14・7・1『改造』)・「雪たゞき」(昭14・4・1『日本評論』)の声喩と主題、幸田文の文章に独特の声喩を思いたい。

悉曇や梵字梵文や中国音韻について露伴をいうことは小論の埒をこえ、力にあまることである。ただし、初期の作に早くも東洋学の知見がうかがわれる。京都帝国大学で露伴が文学を講じ、その門下に春日政治まさしがあって露伴の退任後に向島まで訪ねており、のちに大矢透の業をついだゆことに注意しておきたい。その大矢透について露伴は語っている。

カナの成立については大矢透といふひとのが調べられたのが大変丁寧に出来てゐる。一番宜しいと思ひます。「音幻論」附録『言語と文字の間の溝』昭13・9『文学』。

そのとき、たとえば角筆文献（註）のことが岩波書店の羽仁五郎記者あいてに語られていた。さりげない談話のなかに露伴の眼識や先見を読み取ることができよう。『音幻論』が総体、春鶯囀「人來ひとく」や『伊勢物語』第九段の都鳥や角賀・海上の地名のことなど、取捨は人々の自由であるが、語例も話題も豊かであった。

しかし、いぶかしいと言えば、なぜ露伴は功を急がず、万事が意にまかせぬ敗戦時になってから事を急いだのであろうか。さかのぼってその文語体と、言語・文章にかかる独自の考え方がなぞであり、その樹海の地鳴り、蔵海くらうみの海鳴りに耳を傾けるばかりである。

注

二 序

(1) 小論の注と本文との『』は書冊、「」は資料・文辞の引用、〈〉は小見出し、刊記は露伴との先後、それぞれの目安とした。引用と年譜とは左によった。

幸田露伴『音幻論』昭22・5・30 洗心書院

昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第六十一巻』「幸田露伴」二 著作年表、四 資料年表」ほか 昭63・10・5 昭和女子大学近代文学研究所

三 シとチ

(2) 『久保田万太郎全集』第十七巻 昭43・3・25 著作権者 慶応義塾 中央公論社(昭16・6 『日本評論』、(所収『水の匂』昭17・12 武蔵書房) 「〈幸田先生と島崎先生〉八九年まへ……とおぼえてゐる。慶応義塾の歌をつくつていただけまいか、その御内意をうかがひに、岩波茂雄さんに紹介してもらひ、(中略)そればかりでなく、日を改めて、今度は水上瀧太郎君と二人でもう一度おじやました。」

(3) 馬淵和夫『五十音図の話』三 江戸時代の「五十音図」四 中世の音図「五 平安時代の音図」ほか 1993・7・1 大修館書店

(4) 大野晋「仮名遣の起源について」(『国語と国文学』二七ノ一二、昭25・12) 築島裕『歴史的仮名遣い その成立と特徴』六 字音仮名遣いについての研究——漢字音研究の仮名遣い説への導入」七 明治時代以後の仮名遣い——歴史的仮名遣いの飛躍的普及」(中公新書) 1986・7・25 1994・7・30 〈5版〉

(5) 『時代別国語大辞典 上代篇』上代語辞典編修委員会 昭42・12・10 三省堂 「し」の項

(6) 石川雅望『雅言集覧』〈中島広足加筆『増補雅言集覧』五十七冊 明37 広益図書・国語研究会 明36・10 明37・3 上・中・下 再版 明治書院

- (7) 久曾神昇『日本歌学大系 別卷二』昭41・2・20 風間書房 「第廿一、ひかたあなしなどの風をふつき」 「又乾風をあなしと云。」 「無名抄云、しなどの風とて、中臣被にある風は則是也。私云、しなどは所名也。意外に風はやき(所)也。」 顕昭注では露伴引例の通俊歌を俊頼歌にしている。
- (8) 貝原益軒『日本积名』(元禄12成 13刊、益軒全集1)
- (9) 慈円『拾玉集』(流布の七卷本〈文禄3〉・五卷本〈貞和2〉・異本〈嘉暦3〉)。いずれの本によるか未詳。
- (10) 『日本国語大辞典 第二版』日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館辞典編集部 2000・12・20 〈第二版〉小学館 「ながし」の項
- (11) 〈大野晋解題〉『古事記伝』(『本居宣長全集第十卷』昭43・11・25 「伝十八之卷 白檮原上卷」)  
○見東行は、比牟加之ヒムガシノ加多爾許曾伊伝麻佐米カタクニコソイヤデマサメと訓むべし。
- (12) 『沖繩古語大辞典』『沖繩古語大辞典』編集委員会 〈代表外間守善〉 平7・7・10 角川書店  
「ひがし」【東】オ古 方位の東。『音韻字海』に「東加失」とある。(略) 補説「ひが」は「ひがし」(東)の「し」の脱落。(中略) 語形 ひか・ひが・東・ぶが・ぴが・ぴがー・東ひがし・ひざ・ひじゃ・ひじゃ・ひだ・ひぢャ・東  
「ひがし」【東・比嘉】オ古 地名。比嘉は、沖繩に広くみられる地名・人名で、語源は「ひがし」の「し」が脱落したもの。(略) 語形 ひか・比嘉
- (13) 鎌田五郎『金槐和歌集全評釈』昭58・1・15 風間書房

- (14) 橋本進吉「国語仮名遣研究史上の一発見——石塚龍麿の仮名遣奥山路について——」(『帝国文学』第23卷11月号 大6・11)
- 橋本進吉「上代の文献に存する特殊の仮名遣と当時の語法」(『国語と国文学』第8卷第9号 昭6・9) ほか(所収『文字及び仮名遣の研究』(橋本進吉博士著作集 第三冊) 橋本進吉博士著作集刊行委員会 昭24・11・5 昭45・3・25第十刷 岩波書店)
- 池上禎三「古事記に於ける毛母について」(『国語国文』昭7・11)
- 有坂秀世「古事記に於けるもの仮名の用法について」(『国語と国文学』昭7・11) 有坂秀世「古代日本語に於ける音節結合の法則」(『国語と国文学』昭9・1) (所収『国語音韻史の研究』昭19・7・20 明世堂書店、『国語音韻史の研究』昭32・10・10 三省堂)
- (15) 名和道円新刻『倭名類聚鈔』元和三年二十卷本 大坂心齋橋筋順慶町書林渋川清右衛門「霖雨シメツレ 孫ムス 恂ムシ曰カ霖雨シメツレ小雨也ナリ音與レ終同シ漢ニ云鈔禮ノ禮ノ貞ノ」
- (16) 『清輔集』(『新編国歌大観 第四卷 私家歌編 I 歌集』昭和60・5・16 初版「新編国歌大観」編集委員会 角川書店)
- (17) 『新訂増補国史大系第三十六卷饗應・弘文・貞観』黑板勝美 国史大系編修会 代表丸山二郎 吉川弘文館 昭40・3・31 「六月晦大祓ハヒ」
- (18) 天野信景『塩尻』(『日本随筆大成』第三期) 15 昭52・11・12 「卷乃六十 正徳 瓢は旋風也カゼ(略) 我国にしては級長戸部神と号す。」

- (19) 『夫木和歌集』(『新編国歌第観 第二巻 私選集編 歌集』昭和59・3・15 初版「新編国歌大観」編集委員会 角川書店)
- (20) 森川許六撰『風俗文選』(十巻五冊 宝永3刊) 伊藤松宇校訂 岩波文庫30209-1 1925・10・15 第一刷 1987・4・8 第四刷 「巻乃二 賦類 湖水ノ賦 李由」
- (21) 東條操『南島方言資料』昭8・7・10 刀江書院(所収『宮良當壯全集』15 昭56・5・15 第一書房)「南島方言資料八重山乃部 語彙の部 12暴風 タイフー ウーカジ カシフム 13東風 アー里 カジ 14西風 イー里カジ 15南風 パイカジ 16北風 ニスカジ 17西北風トラ又はカジ 18東南風 シマヌ又はカジ 19西南風 サンヌ又はカジ 20西北風 ニーヌ又はカジ」
- (22) 越谷吾山(秀真)編輯『諸国方言物類称呼』(五巻五冊 安永4 江都書林大阪屋兵三郎・伊南甚助、同年 江都須原屋市兵衛・同善五郎、寛政10 浪華書林塩谷忠兵衛・河内屋太助小河屋六兵衛(所収『生活の古典双書17 物類称呼<杉本つとむ解説>』昭51・5・10 八坂書房)「巻之一 天地 風 かぜ〇」
- (23) 太田善斎『俚言集覧』(二六巻、寛政9、文政12) 井上頼圀『増補俚言集覧』明32・8・10 相統者兼増補者近藤瓶造 発行者近藤圭造 皇典研究所「鬮いなさ 東南の風をいふ」
- (24) 洒堂編「市の菴連句」『日本俳書大系(2) 芭蕉時代 蕉門俳諧前集』(編者 勝峯晋風) 神田豊穂 大15・7・10 <春秋社内> 日本俳書大系刊行会 1995・8・25 復刻第1刷 日本図書センター
- (25) 天野信景『塩尻』(『日本随筆大成』第三期) 14 昭52・10・12 日本随筆大成編輯部 吉川弘文館

旧〈第三期〉第九卷 昭5・11 日本随筆大成刊行会「卷乃三十五 宝永」

(26) 『令義解』大宝令『増補国史大系』昭47・7・30 吉川弘文館〈類従本・明和4源元寛刊本〉「巻四

軍防令 愛発是也。」

#### 四 近似音・本具音・ン

(27) 河野六郎・千野栄一・西田龍雄編『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』2001・7・10 三省堂 「序」

(28) 〈秋本守英校訂〉菅原為長〈龍谷大学善本叢書〉『字鏡集』龍谷大学仏教文化研究所 昭63・3・31

思文閣出版 〈七巻本 巻三(三十才) 魚部「未鮓カイツカ」 昭63・3・31

(29) 京都大学文学部国語国文学研究室編〈狩谷棧斎〉『諸本集成倭名類聚抄 索引篇』昭43・9・30増補版、平3・7・10再版第五刷 臨川書店

編纂資料印影叢書国書第二巻 棧斎書入 倭名類聚鈔 二 昭62・12・15初版 早稲田大学出版部

(30) 谷川士清『和訓栞』(安永6(明16)、『和訓栞』(井上頼圀・小杉榎邨増補「上巻」「中巻」「下巻」

明31 野村秋足校訂「後編」明32) 昭48・5・4 名著刊行会 「下巻 鱈魚なりといへり又にごひと

もいふ、「なお「きつに 狐をいふきつにともいふ伊勢物語のきつにはめなのてを」

(31) 『言泉』〈大辞典ことばの泉〉大倉書店版復刻限定五〇〇部 昭54・7・5 ノーベル書房

(32) 松井簡治・上田萬年『大日本国語辞典』大4・10・8初版 昭3・10・3 昭10・10・10修訂版 富

山房 「に—ごひイ さい。みごひ。」

大8・12・15初 昭4・4・15十八版 昭16・2・28修訂版 「みごひ 白魚 にごひの異名。和



名八「騒吟譚」

- (33) 大槻文彦(右相統者大槻清彦)『大言海』昭31・3・1新訂版 昭57・2・28新編版 富山房 「今、又、訛シテ、にごひ。」
- 山田忠雄述〈責任編集〉『近代国語辞書の夜明け前』〈国立国会図書館蔵〉明治初期辞書集成 目録IV〈1989・2・6 ナダ書房 「内視的に 四動物名 若干」
- (34) 濱田敦『日本語の史的研究』「ガ行子音」「撥音と濁音との相関性の問題——古代語における濁子音の音価——」ほか 昭59・8・30 臨川書店
- (35) 『日本国語大辞典 第二版』「ねーこ【猫】」の「語源説」
- (36) 川村多實「萬葉のカマメを讀んで」『萬葉』第二十九号 昭33・10
- (37) 正宗敦夫編纂〈小野蘭山〉『本朝草木啓蒙』(『日本古典全集』第三期 昭4・9・20 日本古典全集刊行会、昭53・2・20 現代思潮社『重訂本草綱目啓蒙』四 「〈卷乃四十三 水禽〉鷗 肥前ネコドリ筑前ウハミ中国ネコサギ筑後ウミネコ上総ハマネコ武州本牧シホコヒドリ」
- (38) 伴信友『中外経緯伝』(『伴信友全集』五卷 〈明45刊国書刊行会版の覆刻〉ぺりかん社) 〈草稿第一〉「さて名の都奴我は角額にて、かの一書に、額有<sub>レ</sub>角人泊<sub>二</sub>越國<sub>一</sub>筈飯浦、故号<sub>二</sub>其処<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>三角鹿<sub>一</sub>とみえたるをも思ふべし、(中略) さて又任那は上にいへる如く、(中略) なほいはば昔より壬生にミブとニブと二様唱へ来れるも、」
- (39) こまつ ひでお「蜷という貝——漢字表記を音声化すべきでない場合——」『馬淵和夫博士退官記念

国語学論集』馬淵和夫博士退官記念国語学論集刊行会編 昭56・7・1 大修館書店

- (40) 吉本隆明『言語にとって美とはなにか 第I』昭40・5・20 勁草書房 「第一章 言語の本質」自己表出として〈海〉といったとき

阪倉篤義「海上(うなかみ)」『萬葉』第百十号 昭57・6

- (41) 〈大野晋解題〉本居宣長『呵刈葭』上・下(『本居宣長全集』第八卷 昭47・4・25 筑摩書房)

樋口覚『の』の音幻』平3・5・11 五柳書院 「「ん」と「む」の戦い 上田秋成と本居宣長の『呵刈葭』論争」

- (42) 尾形仿・森田蘭『蕪村全集』第一卷 1992・5・25 講談社

- (43) 濱田敦『続朝鮮資料による日本語研究』「日本語と朝鮮語 閉音節語存在の仮説」昭58・8・25 臨川書店

- (44) 『時代別国語大辞典 上代篇』には于万古(『日本国現報善悪靈異記』中卷第一六話・『令集解』喪葬)と牟麻古(『和名類聚抄』卷第二親戚類)とをあげる。

- (45) 柳田国男・丸山久子『分類児童語彙』上巻 昭24 東京堂、丸山久子増補(未刊の下巻部分を追加)『分類児童語彙』昭62・10・5 国書刊行会 露伴の例は幼児。

- (46) 長恵筆『魚山薑芥』(明応5) 〈葦原寂照(真言声明)『南山進流明治改正魚山薑芥集』1892刊行の由。未見。

金田一春彦『四座講式の研究』昭39・3・31 三省堂 第四篇「〈四座講式〉によって推定される鎌

- 倉時代のアクセント 第一章 総説〔十・六〕〔3〕各漢字に施された声点はいわゆる(呉音)の四声である。〕〔4〕たとえば、「如来」という語は何度出て来ても(上上型)であり、「附録(楽譜8(a))」〔47〕湯沢質幸解説〈東條義門〉『男信』〈勉強社文庫61〉昭54・5・31 ○四(ペ26)「カノ悉曇大底ニ。空点・ノ・ヲハ不可必有音トイヘリケント合セ考フヘシ。」
- (48) 柴田武・北村甫・金田一春彦編『日本の言語学 第二巻 音韻』北村甫「解説 音声と音韻」、神保格「国語の音声上の特質」(『国語と国文学』4巻4号 昭2)、服部四郎・山本謙吾・藤村靖「母音の鼻音化と鼻音」(『小林理学研究所報告』6巻4号 昭31)、服部四郎・山本謙吾・小橋豊・藤村靖「日本語の母音」(『小林理学研究所報告』7巻1号 昭32)、山田美妙「日本音調論」(『日本大辞書』明25)ほかに、佐久間鼎『国語の発音とアクセント』(大8、同文館)、小倉進平『国語及朝鮮語発音概説』(大12、近沢印刷所出版部)、神保格『国語音韻学』(大14・明治図書)、佐久間鼎『日本音声学』(昭4、京文社)、佐久間鼎『一般音声学 発音と発声』(昭7、内田老鶴圃)から収載。
- (49) R.Jakobson: 早田輝洋訳「史的音韻論の諸原則」服部四郎編『ローマン・ヤコブソン選集1 言語の分析』1986・3・1 大修館書店)
- 『言語』Vol.5 No.6 '76 [特集・母音調和をさぐる] (服部四郎「上代日本語の母音体系と母音調和」1976・1 大修館書店)
- (50) 柴田武「音韻体系」(国語学会編「方言学概説」編集委員会〈委員時枝誠記・亀井孝・金田一春彦〉『方言学概説』一「音韻」日本の方言 昭37・11・30、昭43・1・1再版 武蔵野書院)これによれば

- 日本の方言をシラビーム方言〔(1)四つがな弁・(2)中性弁・(3)ズーズー弁〕とモーラ方言〔(4)四つがな弁・(5)中性弁・(6)ズーズー弁〕とに大別し、ズーズー弁 $\parallel$ 裏日本・中性弁 $\parallel$ 裏日本と表日本の中間地域・四つがな弁 $\parallel$ 表日本とする。日本語の母音優位説や気候 $\rightarrow$ 方言の相関説とは別な見地か。なお
- 『国語学』178号 1994・9・30 早田輝洋「日本語の音節」、窪蘭晴夫「日本語の音節量について」、
- 「音節構造の歴史」補説、柳田征司「母音優位・子音優位 $\rightarrow$ 東西両方言の違いは、いつ、どのようなにしてなぜ生じたか $\rightarrow$ 」、早田輝洋・添田建治郎「音韻史の展開 $\rightarrow$ 音韻構造の変遷 $\rightarrow$ 」総括
- (51) 濱田敦『日本語の史的研究』「ガ行子音」・「撥音と濁音との相関性の問題 $\rightarrow$ 古代語における濁音の音価 $\rightarrow$ 」 昭59・8・30、昭63・4・5再刷 臨川書店)

## 五 韻

- (52) 湯沢質幸解説〈東條義門〉『男信』〈勉誠社文庫61〉昭54・5・31 「〇三(ペ24)㊦㊧㊨㊩」  
「〇五(ペ28) 韻ノ字トモノ其韻ヲ。らりるれるニ転用セルモ定リ有テ。其レハかよぬねのニ用ル字トハ相違シ。」
- (53) 藤堂明保「中国の文字とことば 四、中古漢語の音韻 五、呉音と漢音 六、唐宋音の源流 $\rightarrow$ 杭州を中心とする江南共通語 $\rightarrow$  七、中世漢語の音韻 八、上古漢語の音韻(藤堂明保編『学研 漢和大字典』昭53・4・1初版、昭53・7・1第2刷 学習研究社)
- (54) 水谷真成「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」『東洋学報』第参拾九卷第四号 昭32・3 『日本書紀』の表記法に先立つ問題をふくんでおり、露伴の没後に始まった一連の論考

の初期のものとしてかかげたい。

- (55) 牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編『中国文化叢書1 言語』Ⅱ 音韻論 水谷真成「2 上中古の間における音韻史上の諸問題」、平山久雄「3 中古漢語の音韻」、菊田正信「4 現代語の発音」昭42・11・20初版 昭56・12・10五版 大修館書店
- 三根谷徹『中古漢語と越南漢字音』「韻鏡と中古漢語」「韻鏡の三・四等について」1993・5・25 1995・3・31第2刷 汲古書院
- (56) 幸田露伴「元時代の雑劇」『太陽』明28・1〜9、「支那第一戯曲の梗概」『女学世界』3巻1号〜3号 明36・1・1〜3・1、「元時代の俗諺」『太陽』9巻3号 明36・3・1
- (57) 頼維勤「清朝以前の協韻説について」『中国音韻論集』〈頼維勤著作集I〉1989・2・2 汲古書院
- 高松政雄「叶韻」『日本漢字音論究』第六章 平9・11・20 風間書房
- 幸田露伴「顧炎武」(雑誌『新修養』大5・1月号「明末の英雄顧炎武」―未見) 『露伴全集』第三十一卷
- (58) 馬淵和夫『韻鏡校本と広韻索引』昭29・3・30 日本学術振興会、昭45・1・15新訂版 巖南堂書店
- 藤堂明保・小林博『音注韻鏡校本』昭46・3・15 木耳社
- (59) 田久保周誉著・金山正好補筆『梵字・悉曇』昭56 平河出版社 「後篇 悉曇の解説 悉曇字母の分類 悉曇字母の発音 悉曇連声」
- 馬淵和夫『増訂 日本韻学史の研究』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、昭59・11・30増訂版 臨川書店(昭40・3・30初

版 日本学術振興会「第一篇第一章第三節 中国悉曇学 三『涅槃悉曇章』」

(60) 尾崎雄二郎「国語における撥音、促音、および長母音を音声学的に観察するための作業仮説」『中国音韻史の研究』〔東洋学叢書〕昭55・2・29 昭61・2・28第二刷、創文社

濱田敦「促音と撥音」「音便——撥音便とウ音便との交錯——」『国語史の諸問題』第一編三、五〔研究叢書27〕昭61・5・22 和泉書院

濱田敦「ガ行子音」「撥音と濁音との相関性の問題——古代語における濁子音の音価——」『日本語の史的研究』昭59・8・30 臨川書店

(61) 小松英雄「日本漢字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程——中世博士家訓点資料からの跡付け」〔『国語学』25 昭31・7〕

(62) 大野晋「仮名遣の起源について」〔『国語と国文学』27・12、昭25・12〕

(63) 藤堂明保「3 漢字概説」〈四 中古(隋唐)の漢語の音系〉「7 ケヘメの甲と乙」「8 オ段の甲類と乙類」〔『岩波講座日本語 8文字』〈編集委員大野晋・紫田武〉1977・3・29 岩波書店〕

## 六 音の各論

(64) 松本克己「古代日本語母音論——上代特殊仮名遣の再解釈」〈ひつじ研究叢書(言語編)【第四卷】〉(注(51) 松本克己「日本語の母音組織」収載)1995・1・30 ひつじ書房

(65) 井上文雄「東北方言の変遷」2000・2・29 秋山書店 〈第三部 第17章 2、母音〉  
大橋勝男「新潟県方言の記述的研究 第一卷会話・音声編」2000・2 高志書院

- (66) 柳亭種彦『用捨箱』(『日本隨筆大成』〈第一期〉) 13 昭2・10・28 日本隨筆大成編輯部 昭50・12・1 (丸山季夫) 吉川弘文館 「上の巻(十一) 六法詞ろっぽうことば 第一に海鬢おしを売出した後、初春にうり来りしゆゑなるべし。」
- (67) 赤松宗旦『利根川図志』(安政二乙卯季春 赤松義知識) 柳田国男校訂(岩波文庫) 1938・11・15、1944・3・8 第2刷(2031) 「その根はあじ煮あじくて食ふべからず、さらば恵具は煮あじの義こころなるか。」
- (68) 山田忠雄「橋本博士以後の節用集研究」『国語学』5輯 昭26・9  
根上剛士「易林節用集の「イ」「キ」「ヲ」「オ」「エ」「エ」部成立と「仮名文字遣」」『佐伯博士古稀記念国語学論集』佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会編 昭44・6・21 表現社
- (69) 浪華撰『有磯海』(浪華撰上) 『日本俳書大系』第三卷(編者勝峯晋風) 著作者神田豊穂 大15・8・10 (春秋社内) 日本俳書大系刊行会 1995・8・25 「伊賀の城下まににうにと云ものあり。わるくさき香なり。」
- (70) 市古貞次『御伽草子』(日本古典文学大系38) 昭33・7・5 第1刷、昭44・7・10 第6刷 岩波書店 頭注「貫布。「さよみ」ともいう。丹緑本「さよみ」。科木(のきな)の皮の繊維でこまかく織った布。細い麻糸で織った布。のちにはふつうの麻布をいう。ここも麻のかたびら(裏をつけぬひとえの服)であろう。」
- (71) 『万葉集仙覚抄万葉集名物考 他二篇 万葉集古注釈大成』昭53・11・20 日本図書センター 「伊いか隠かくるまで 萬代といふ伊は発語詞也梵語には阿字をもつて為<sub>レ</sub>発語の詞<sub>一</sub>和歌には伊字を以て発語の詞とする也」

- (72) 母音と子音を峻別しない。ハ行転呼音にかかわり、つぎの視点が考えられようか。  
 迫野虔徳『文献方言史研究』1998・2・25 清文堂 「第一章 第二節 外国資料と方言」 「第三節 「コウス」(毀)の成立——語中ヲ(ヲ)音の残存——」
- (73) 『天治本新撰字鏡(増訂版)』(大5 大槻文彦、昭8改版、昭19京都大学国文研究室編、昭42・12・15 平4・4・25 京都大学文学部国語学国文学研究室 代表安田章 臨川書店 「天治本35才 頭注」 繁籙同字補・反・支・毛・支・」
- (74) 井上頼圀・小杉楹邨増補・野村秋足校訂〈谷川士清〉『蘭和訓栞』明32 名著刊行会 「はらゝぐ 神代紀に散をよめりあらゝくと通へり書ノ禹貢にて壤をはらゝけりとよめるも同じ又散をはらゝかすとよめりかすノ反く也萬葉集にあまを舟はらゝに浮てとよめるも同じ」
- (75) 東京大学国語研究室(坂梨隆三)『東京大学国語学資料叢書 第十四卷 下学集三種』昭63・3 「天文二十三年本(二二オ) 蠅ハイ」「永録二年本(三一オ) 蠅ハイトリ」「黒川本(第一冊二二オ) 蠅ハイ」
- (76) 岡見正雄・赤松俊秀校注〈慈円〉『愚管抄』(『日本古典文学大系86』〈島原本〉昭42・1・25 岩波書店)「巻第四 後白川 七星ノハ、クロノカク候テ」
- (77) 『類聚名義抄』〈仏中〉「ハウ媚胡秘反コヒ ヲヤス トヲシ アツクシフ コフル」
- (78) 松田好夫校訂〈賀茂真淵〉『語意・書意』(底本―橋彦本) 岩波文庫 「○延言約言題注」
- (79) 『礼容筆粹』七卷七冊 享保2刊、三百余条あり武家故実の書とされる。未見。
- (80) 喜多村信節『喜遊笑覧』(文政13) (所収『日本随筆大成 新版別巻』7、10 〈旧版二期別巻4 昭2・



- 2・15) 日本随筆大成編輯部 昭54・5・7 吉川弘文館) 「卷十二下 草木 ひよんの木」大和本艸」  
 に俗に猿瓢といふとあり」
- (81) 小高敏郎・森川昭・乾裕幸 『古典俳文学大系 貞門俳諧集二』昭46・3・10 (編集 創美社) 集英社  
 <北村湖春編『続山井』> 「夕貌にみとるゝや身もうかりひよん 伊賀上野松尾 宗房」
- (82) 新村出「馬鹿考」(『中外日報』昭5・1・13) 14) 15 (所収『東亜語源志』昭5・11 岡書院、荻原  
 星文館) 「漢訳梵語の和臭形たるバクカ又バツカ乃至バカ等のいづれより」  
 柳田国男「馬鹿考異説——『日本の言葉』を読みと——」(原題「日本の言葉」) 『創元』昭12・2・  
 5、「鳴濤の文学」(原題「ヲコの文学」) 『芸術』第三号 昭22・4・30 八雲書房(所収『柳田国男全  
 集』第十九卷 1955・4・25初版第一刷) 「一六 wとb」
- (83) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀 上』(『日本古典文学大系67』1993・9・6  
 岩波書店) 神代下・海宮遊行(一書目) 「必ず善き術ほけあらむ。願はくは以て救ひ給へ」  
 三木紀人・浅見和彦・中村勇雄校注「宇治拾遺物語」(『日本古典文学大系42』1990・11・20 岩波書店)  
 「(下) (一〇四) 獵師、仏ヲ射事 巻八ノ六 たぬきを射害(おじ)、其はけをあらはしける也」
- (84) 秋本吉郎校注『風土記』(『日本古典文学大系2』昭33・4・5第一刷、昭41・4・30 岩波書店)  
 「丹後国逸文」<浦の嶼子> 「子娘曰、其七豎子者、昂星也。(其の七たりの豎子わらはは昂星すばるなり。)」
- (85) 上代特殊仮名遣の甲類・乙類の別に同調しない見地もあろうか。なお考えたい。  
 『言語』Vol. 4 No.4 75) (渡部昇一「神」と「上」の語源について) 大野晋「証拠で論議をか

わしたい〈渡部昇一氏へ〉

森重敏「上代特殊仮名遣いとは何か」『萬葉』第八十九号

森重敏「上代特殊仮名音義―五十音図的音韻体系の論―」昭50・9 昭59・7・30、『続上代特殊仮名音義―乙類仮名を含む語彙の攷―』昭62・2・10 和泉書院

(86) 馬淵和夫『増訂 日本韻学史の研究』I・II・III 昭59・11・30増訂版 臨川書店(昭40・3・30初版 日本学術振興会) 第一篇第一章第三節 中国悉曇学 ハ 中国音韻学と悉曇学の交渉(ペ135)

(87) 『百鬼夜行画卷』に文字は見えないが喜多村信節『喜遊笑覧』三・上に「〈化物絵〉(略)赤口ぬらりひよん ぬっへらほう」と見える。

(88) 「ケチ」『現代』大9・10・11・12・1、1・11・3 改題「望樹記」

(89) 「田原多良尾等の地名に就いて」『同人』41号 大8・11・1

(90) 「被覆形」(続く形)として、「露出形」(切れる形)に対比されるものであろう。

有坂秀世「国語にあらはれる一種の母音交替について」『音声の研究』第四輯 昭6・12(所収『国語音韻史の研究』昭19・7・20 明世堂書店、『国語音韻史の研究』第一篇第一章)昭32・10・10

三省堂)

(91) 永積安明校注『古今著聞集』(『日本古典文学大系84』昭41・3・10 第1刷 昭42・2・15 岩波書店 「興言利口 第一六・五三八 順徳院御時恪勤者某大番の者を欺き高足駄にて油小路を通行の事

〈わきまへのあるべきやう、引出物の程らひなどさだめて〉)

- (92) 吉川幸次郎・丸山真男・西田太一郎・辻達也校注『荻生徂徠』(『日本思想体系36』1973・4・10 岩波書店)「政談」〈安政6刊、片仮名表記〉「江戸中ニハ引張りタラヌ也」
- (93) 〈大野晋解題〉『玉かつま』(『本居宣長全集1』昭35・5・15 筑摩書房)「ちりめんなるべし」「但し昔はちぢめん」
- (94) 一茶『方言雑集』(信濃教育会編『一茶全集』第七卷 雑録 信濃毎日新聞社)「オツパリ。引請ケテ働クコト。江戸ヨツパシナドニ同。」
- (95) 檜谷昭彦・江本裕校注『太閤記』(『新日本古典文学大系60』1996・3・15 岩波書店)〈一 秀吉一七一命一於二敵国一成三要害之主ト事〉「彼かのすつばの功者共評議ヒヤウキしけるは、」
- (96) 『甲陽軍鑑』(岩波文庫卷六まで)「アレコソ足輕大将ヨナンドト云ヒテ、代々スツハト云者ノ長吏ゾ」(品卅九)「家老の酒井左衛門尉、石川伯耆すつはをいだし見せつれば」
- (97) 川瀬一馬解説『十卷本伊呂波字類抄 合本五冊』昭62・5・20 所蔵大東急記念文庫 雄松堂出版  
「黒子ハ、クソ(人躰 付病瘡類)」
- (98) 濱田敦『日本語の史的研究』昭59・8・30 昭63・4・5再刷 「播磨国名考」(『国語と国文学』三十七ノ一〇)
- (99) 小倉肇「サ行子音の歴史」『国語学』195集 1998・12・31
- (100) 亀井孝「硯縮涼鼓集を中心にみた四つがな」『国語学』第4集 昭25・10・10
- (101) 義経記奥州本『蝸牛庵聯話』「義経、弁慶〈衣川合戦の事〉」昭18・1・25 中央公論社

- 福田晃・神田洋・真下美弥子編『伝承文学資料集成 第十輯 奥浄瑠璃集成 (一)』平12・7・19 三  
 弥井書店 「解題・解説編 (一)真下美弥子「奥浄瑠璃テキストの性格」」
- (102) 黄善夫本『後漢書』(三) 平12・2 原本所蔵 国立歴史民族博物館 解題 尾崎康 古典研究会  
 汲古書店 「後漢書八十八 西域傳第七十八(第五十九冊) 大秦國、一名<sup>ハ</sup>犁鞞、以<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>海西<sup>一</sup>、亦云<sup>ニ</sup>海西國<sup>一</sup>、」
- (103) 『大日本仏教全書(97)』〈編集代表高楠順次郎・望月信享〉昭8・8・10 有精堂出版部『塵添瑤囊抄』  
 卷の第三「【廿三】魚一喉事<sup>コソ</sup> 付魚類事言便ノ事 (略) 鰓<sup>トシヤウ</sup> 上長<sup>ツマシ</sup>」
- (104) 寺島良庵『和漢三才図絵』(『日本庶民生活史料集成 第二十八巻』)〈和漢三才図絵(一)〉 代編委員谷  
 川健一) 1980・4・30 三一書房 「泥鰌<sup>ドジョウ</sup> 鰓<sup>シヨウ</sup> 鰓<sup>シヨウ</sup> 鰓<sup>シヨウ</sup> 俗云止之也字 泥鰓字ノ音之訛也」  
 『塩尻』〈巻乃一〉「泥鰌 産<sup>ニ</sup>水田中<sup>一</sup>大如<sup>レ</sup>指。我邦登知也字也。」
- (105) 小山田与清『松屋筆記 第一』明41・7・10 〈<sup>彌</sup>彌<sup>市</sup>島謙吉〉国書刊行会 「〈巻之三 卅五〉泥  
 鰌の訓義 今俗に泥鰌を「ドヂャウ」といへり<sup>ト</sup>与清按に之は泥津魚<sup>ドロツ</sup>の義なるべしされば仮名には「ドツ  
 ヲ」または「ドジョ」など書べき也」 なお「頭書」に「蓋囊抄」「運歩色葉集」「増補多識篇」をひく。  
 (106) 『和字正濫鈔』(『契沖全集』第七巻所収本一<sup>元</sup>元禄8初刊本对照) 〈巻五〉「辻つし 旋毛をも俗につ  
 しといへるは辻もつむしにて義みな通すへし。文字は十字の意にて和俗の作れるにや」
- (107) 小高敏郎『新訂松永貞徳の研究 続篇』昭31・6・25 至文堂 昭63・10・10 復刻版 臨川書店  
 〈第一章 第三節 評論、語源研究、復刻 内容〉所引へい「稲 命<sup>いのち</sup>の根<sup>ね</sup>敷<sup>ぬか</sup>」「鰐 わに。日本紀に

ある字なれば神語か」

貝原益軒『日本釈名』〈中巻〉「石<sup>イシ</sup> 覚<sup>ママ</sup>」「仙覚が曰く、いは発語の詞、しはしづむ也。篤胤謂、いやしと云意なるべし。石は金玉よりいやしきゆへ也。中を略せり」寛文2 六巻三冊 寛永5く21頃か、元禄9・8 本屋利兵衛・武兵衛」と架蔵のメモにあるが典拠未詳。

(108) 大田南畝『一話一言』(『大田南畝全集』『日本随筆大系別巻 一話一言』2 昭53・9・30 日本随筆大系編輯部 解題 北川博邦・小出昌洋 卷十五 講習余録抄)「講習余録 宝永丙戌晩秋二十六日夜綱斎識の序あり、九月廿六日より十二月二十一日まで門人に会して講習せる語を筆記せり。(中略) 十字唐音ニテツンノ音也。ソレユヘツンジト書キタル字也。唐詩ニ十字街頭吹尺八トアルモ此事也、コレ有り来ル説コノ通り也。然ドモ和詞ニ、モノ、アツマル肝要ノ処ヲモ津ト云事ナルモ不知ソレユヘ十字ト書テツジト唱ルナラン歟、カヤウノ事モ此迄ノ物語覚用タルガヨシ。」

(109) 老鼠堂永機・其各堂機一校訂『支考全集』〈俳諧文庫 第八編〉東京博文館 明31・8・5 「葛の松原・笈日記・続五論・西華集東華集・白陀羅尼・三匹猿・南無俳諧・夏衣・俳諧十論・発願文・三千年化・蓮の葉風・桃の首途・芭蕉三日月日 記、野盤子考〈宮島六越著〉」には収載されていない。

『日本俳書大系(4)』〈編集勝峯晋風〉著作者神田豊稲 春秋社内 大15・9・10 日本俳書大系刊行会 1995・8・25 日本図書センター 「二十五箇条 芭蕉仮名 ○仮名遣ひの事」「を をんな、山をろし、小桶、於の字、をに同し。」「お おとこ、おろし、桶」「る 不<sup>レ</sup>動類なり。盥手<sup>アラキテ</sup>器<sup>ノ</sup>時なり」「え 中のえ、消<sup>き</sup>ゆる杖、机、此時は杖といふ古実なり。」「右者俳諧之新式有」二十五ヶ条、是我家

之管目也。(下略)」

- (110) 日本語研ぐるうぶ編〈代表 杉本つとむ〉『新刊多識篇』1973・6・30 東京 文化書房博文社 「巻乃五 人部第二 人胞比登乃惠那」**異名** 拾遺<sup>センニン</sup>仙人衣」
- (111) 『新撰字鏡集<sup>天治本</sup>』〈<sup>繁</sup>著兼大槻文彦〉大5・12・20 六合館 〈巻第七 本部 次入声〉「<sup>善胡</sup>古文<sup>中</sup>天<sup>大</sup>」
- (112) 『図書寮叢刊 夫木抄一』昭59・2・29 宮内庁書寮部 〈巻三 春部三 柳歌〉「そひのゐる井くひの柳なはへして めくみにけりなはるを忘れす」とある。
- (113) 賀茂真淵『萬葉考』第二卷(『賀茂真淵全集 第一卷』担当編者 井上豊 続群書類従刊行会) 「侍宿と書からはこゝは殿宿<sup>トイ</sup>也、然は仮名は止乃伊<sup>イ</sup>也、後世とのると書は、おしはかりのわざぞ、」
- (114) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀 上』(『日本古典文学大系67』新装版1993・9・6 岩波書店) 〈神代上第六段〉「原<sup>ニ</sup>其物根<sup>ものざね</sup>、則八坂瓊乃五百箇御統者、是吾物也。」注 バネはタネ(種)。sとtとの交替の例は、sugi(次)とtugi(次)。iso(伊蘇)とitō(伊靱、地名)等の例がある。」
- (115) 荻原雲来編『対照梵和大辞典』新装版 1986・3・25 第一刷 2001・7・6 第十二刷(鈴木学術財団)編集・刊行 講談社Ⅱ発売元 昭54・8 増補改訂版の縮刷) 講談社
- 水谷真成「瑠璃音声考―梵漢対音の問題―」『大谷学報』四三―四 1955・3
- (116) 〈相馬市役所内〉相馬市史編纂会『相馬市史3』〈各論編2・民俗・人物〉 昭50・3・31 福島県相馬市 「六祭り歌 1 相馬流れ山〈第六節〉向い小山の がんけのつつじ／およびなければ 見て

暮らす」これによれば現在は「ツツジ」と表記。

- (117) 国語調査委員会(明35)『音韻分布図二十九枚』中「が」行鼻音之分布図(明38)(収載『国語国文学研究史体成15 国語学』全国大学国語国文学会(編者 佐伯梅友・中田祝夫・林大) 昭36・2・10初版 昭58・7・10増補版 大修館書店)

金田一春彦『日本語音韻の研究』——II 日本語の音韻について—— 8. ガ行鼻音論 昭42・3・31初版 平3・4・30 東京堂出版

釘貫亨「喉音三行弁」と近代仮名遣い論の展開『国語学』192集 1998・3・31

- (118) 幸田露伴『潮待ち草』(明39・3 東亜堂書房、大10・3再刊(縮刷名著叢書 第三編)「十七香」 幸田露伴「香談」『中央公論』昭18・1 中央公論社(『さゝの葉』所収 昭24・4・30 岩波書店) 幸田露伴「連環記」『日本評論』16巻4号〜7号 昭26・4・1〜7・1 作品は丁謂の「天香伝」をもって結ぶ。

川村湊『音は幻』昭62・5・15 国文社「音は幻——露伴の言語論」『海燕』1982・2月号

- (119) 渡辺綱也校注『沙石集』(『日本古典文学大成85』昭41・5・6第1刷 昭42・2・20第2刷 岩波書店)〈頭注〉「阿本「三宝ノ名ヲモ：外ニハ仏法ヲ憂キ事ニシ内ニハ」五四字なく、次に裏書がある。↓補一三。〉〈補注一三〉「阿本裏書(五九頁注二三)「阿本「裏書云、三善為康記云齋宮忌詞、塔阿良々記(アキラ)内七言、仏立強(ハチリ)、経(カシ)、僧髻長(ナガ)、寺ヲハ瓦曹(ワカキ)、俗ヲハ津乃八須(ハス)、齋片膳(カタカ)、又堂ヲ香燃(カキ)、外七言、死奈保留(ナホ)、病良須牟(ム)、哭塩垂

(シルネ)、打 奈津(ツナ)、穴 久佐比良(ヒラサ)、墓 津知久礼(ツチ)とある。

(120) 『新井白石全集』第四卷(明39・4・25 昭52・6・1復刊 図書刊行会)〈卷之十三穀蔬 草卉 樹竹〉に未見。

(121) 荻生徂徠『南留別志』(日野龍夫編集)『荻生徂徠全集 第十八卷 隨筆2』1983・3・30 みすず書房(附 和歌世話)〔復刻・翻字〕宇佐美瀧水・校

(122) 座談会「幸田露伴先生を囲んで」〈同席者 徳田秋声・和辻哲郎・末広巖太郎・辰野隆・谷崎潤一郎 / 記者 鈴木利貞・室伏高信〉昭10・5・31 赤坂星ヶ丘茶寮 雑誌『經濟往来』9月号

(123) 鹿持雅澄『万葉集古義』(高知市指定「保護文化財」稿本影印版)財団法人高知県文教協会 昭59・3 「波字、旧本可<sub>レ</sub>誤、拾穂本<sub>レ</sub>従 ハ、志は夫<sub>レ</sub>きなり、可比<sub>ハ</sub>伎楚切那利、

(124) 馬淵和夫『増訂日本韻学史の研究』I 昭40・3・31初版〈日本學術振興會〉昭59・11・30 臨川書店 〈第一篇 第一章 第三節 八 中国音韻学と悉曇学との交渉(ペ134)〉「t郡は、普通の舌尖破裂音であるから、はじめ謝靈雲は「舌上声」と命名したが、その曖昧なためか「舌頭声」と変更した。これは一般にもちいられた。『悉曇字記』になって、「喉声」としたのは、牙・齒・舌・唇との體系化をねらったことであろうが、これはまったくまずい命名であった。これによれば、謝靈雲が命名したk群「舌根声」「舌本声」「喉中声」・c群「舌中声」・t群「舌頭声」にあたる音幻を露伴は説いたようである。

(125) 柴田武「オタマジヤクシの言語地理学」『国語学』第53集 昭38・6・30



- (126) 斎藤徳元『尤草子』(『日本随筆大成』第二期 第三卷 昭3・7・15 〈第二期〉第六卷 昭49・2・25 日本随筆大成編集部 吉川弘文館)「下之巻 八 まがれる物」
- (127) 新村出校閲・竹内若校訂〈松江重頼〉『毛吹草』(岩波文庫30-200-1) 1943・12・20第1刷 2000・2・21第6刷)巻第一「勸くはんじやう請」・巻第二「萱くはんざう草の花」・巻第三「荒神くはうじん」・「皇居くはうきよ」など。
- 七 聯音
- (128) 十七の韻 『詩韻』(平水韻)〈平水の劉淵作『壬子新刊礼部韻略』1252年)〉
- (129) 小松英雄『日本声調史論考』第Ⅱ部第6章「日本字音における入声音の諸問題」
- 八 累音・対音・省音・添音・倒音・擬音
- (130) 笈壽雄・田守育啓編『オノマトピア 擬音語・擬態語の楽園』田守育啓「日本語オノマトペの音韻形態」、「日本語オノマトペの統語範疇」、村田忠男「日英語のA/B型オノマトペ・重複形・等位構造表現の関係」、角岡賢二「日本の「擬似オノマトペ」——日本語と中国語の接点——」1993・9・30 勁草書房
- 近藤信義『音喩論 古代和歌の表現と技法』「異界の音と表現の世界」「音と韻の間——『歌経標式』を読む」「音の周辺」「風土記地名命名譚一覽」1997・12・6 おうふう
- (131) 近松門左衛門『大経師昔暦』(藤井乙男校訂『近松全集 第十巻』昭2・12・15初版 昭53・5・10復刻 思文閣出版)「茂兵衛は早大より暦くばりてさきぐのびんび酒の麴ちろくめにて立帰り。」〈頭注〉「美酒を調子づけていひたる也、こん金堂、どう道修町の類なり。」
- (132) 近松門左衛門『伊呂波物語』(藤井乙男校訂『近松全集 第二巻』大14・7・15、昭63・5・10復刻)

〈頭注〉「ごりといふを調子づけたるまでなり。」

- (133) 尾崎雄二郎「漢字の音韻 三 『切韻』——反切のある世界 双声と疊韻」(貝塚茂樹・小川環樹編『中国の漢字』へ『日本語の世界 3』昭56・3・20 中央公論社)

太田晶二郎「勸学院の雀は なぜ蒙求を囀ったか」補注二『東京大学史料編纂所報』第八号(昭47・3) 『太田晶二郎著作集』第一冊 平3・8・10 吉川弘文館

- (134) 高野辰之編『日本歌謡集成 卷五』昭3・11・20 春秋社 「一字治の晒に鳥に洲崎に立つ浪をつけて、浜千鳥の友呼ぶ声は、ちりくやちりく、ちりくやちりくと、友呼ぶ所に、島蔭かげよりも櫓ろの音か、からりころりくと漕ぎ出いて、釣りする所に、釣った所が面白。」

「つとと立つたは杉の木、屈かうだは松の木、松の枝さかの下り枝があちへこちへすじりもじりもじつたる中に藤の花がたよくたよくと咲乱れて、」

- (135) 「オノマトペ」(フランス語)のほか、「活写語」(小松英雄)「音喩」(近藤信義)など。

太田晶二郎「勸学院の雀は なぜ蒙求を囀ったか」補注二『東京大学史料編纂所報』第八号(昭47・3) 『太田晶二郎著作集』第一冊 平3・8・10 吉川弘文館

- (136) 『埤雅』二十卷。宋の陸佃の撰。〈釈魚〉以下八篇。はじめの名は『物性門類』。中国最古の字書『爾雅』の埤補の義をもって改めたもの。禽言体・蘇東坡とあわせ拙稿「露伴〈連環記〉考」の主題にまちたい。

- (137) 亀井孝「春鶯囀」『国語学』第二十九集 昭34・3

九 音幻

- (138) 我部政男『明治十五年明治十六年地方巡察使復命書』上(一八八〇、三一書房) 参事院副議長田中不二麿「地方巡察復命書 二」青森県(土族の状況)
- 葛西富夫『新訂会津・斗南藩史』平4・12・30 東洋書院(一) 会津藩の悲哀(二) 斗南藩霧消 会津人の動向) ペ128 所引『余市農業発達史』明4・6
- (139) 小林勇『蝸牛庵訪問記―露伴先生の晩年―』1956・3・10 第一刷 1975・12・20 第二刷 岩波書店  
「昭和十二年 北海道で」
- (140) 中西梅花・顕昭(「風流問」推定明22、「無題」明22・8・7『読売新聞』)
- (141) 斎藤緑雨「おぼえ帳」(『太陽』第三卷第七号(明30・4・5)〜第三卷第二十四号(明30・12・5))
- (九) 「○其手に三弦さみをも学ばれしほどなれば、大槻如電おほつきじょうでん氏の歌曲に精通せるは、言はずもあるべし。されどもわが知れる人にて最もよく涉獵あさりつくしたるは、幸田露伴かふだろばん氏なり。」4・5〜12・5(『斎藤緑雨全集 卷四』(斎藤賢) 平12・12・20 筑摩書房)
- 森林太郎『澀江抽斎』大5(1916)・1・3〜大5・1・7『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』『鷗外全集』第七卷(大12・5 国民図書会社)「その四十一」・「その五十四」・「その五十五」・「その六十四」・「その百十二」・「その百十四」
- (142) 春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』照7・12・5 財団法人斯道文庫蔵版 岩波書店

太田晶二郎「大矢透博士の著書稿本刊本及び蔵書——伝記的書目——」『東京大学史料編纂所報』第  
五号（昭46・3）『太田晶二郎著作集』第二冊 平3・8・10 吉川弘文館

(143) 小林芳規『角筆文献の國語學的研究』全二卷（研究篇・影印資料篇）昭62・7・28 汲古書院

(二〇〇三・一・一三三)